

42493

教科書文庫

4
810
44-1933
200030
2099

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

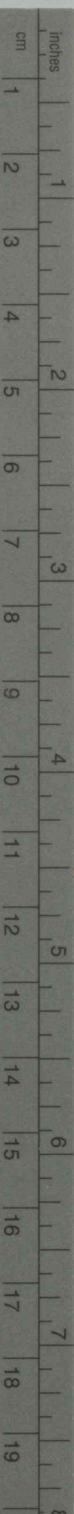


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Fu10
資料室

帝國新國文

卷五



文部省檢定
昭和八年八月十四日
實業學校國語科

資料室

375.9
Fu10

東京帝國大學教授
文學博士 藤村作編

帝國

新國文

卷五



株式會社

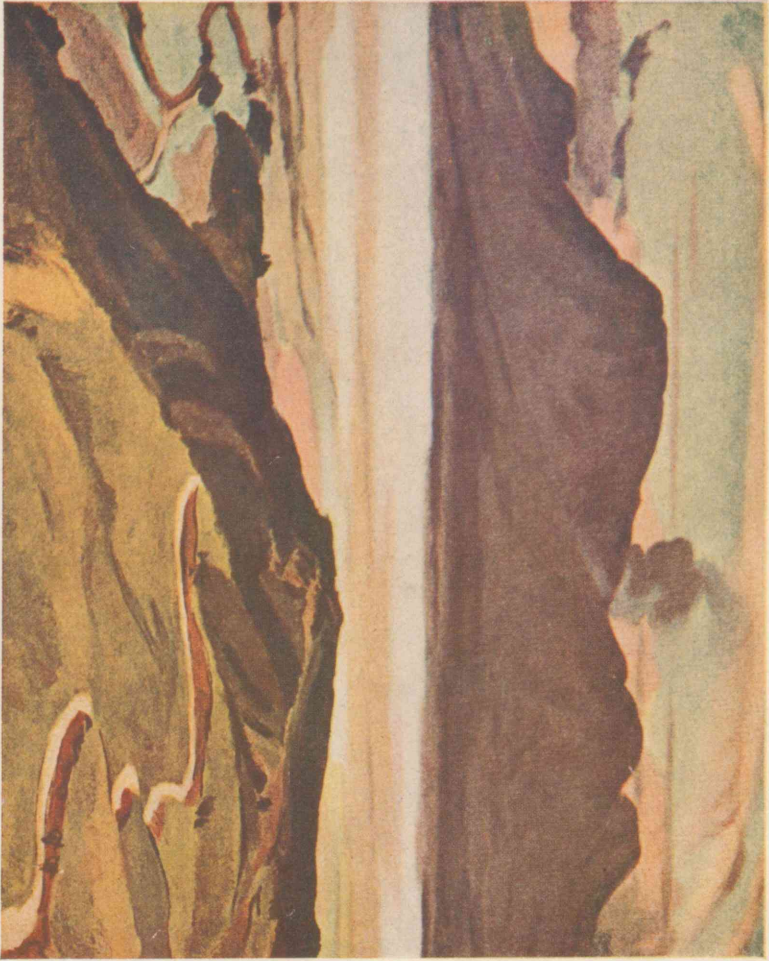
帝國書院

新國文

375.9



(第二〇課參照)



(筆 治 寅 川 石)

山 蘇 阿

林
口
機

帝國新國文卷五

目次

- 〇一 熟慮斷行
- 二 櫻花
- 三 吉野山
- 四 自動車王フォード
- 〇五 ふるさとの山
- 〇六 土
- 七 菖蒲ふく頃
- 〇八 山上の湖へ
- 〇九 仁和寺の法師
- 一〇 崎人一茶

石川啄木

本	吉	若	島	長	石	藤	笹	藤
山	田	山	崎	塚	川	岡	川	村
萩	兼	牧	藤		啄	東	臨	
舟	好	水	村	節	木	圃	風	作
五一	四八	三七	三一	二五	二一	一四	七	一

目次

〇	一一	一茶の俳句
〇	一二	若葉
〇	一三	四季の眺
	一	春
	二	夏
	三	秋
	四	冬
〇	一四	鯉
〇	一五	地下鐵道に乗る
〇	一六	川柳選
〇	一七	アルプスの夏
〇	一八	ツエツペリン來る
〇	一九	瓜盜人

		相馬御風	五七
		正岡子規	六三
		貝原益軒	六五
			六五
			六七
			七〇
			七二
		豊島與志雄	七四
			八一
			八六
		横有恆	八八
			九六
			一〇一

二期

二〇	山のたより
一	阿蘇山より
二	那須より
二一	山雀
二二	落葉松
二三	世に處する道
二四	忠僕
二五	故郷の花
二六	安壽と厨子王

五十嵐	力	一〇六
		一〇六
		一〇八
薄田泣菫		一一一
北原白秋		一一九
勝海舟		一二二
小笠原長生		一二七
(平家物語)		一四〇
森鷗外		一四三

目次終



一 熟慮斷行

藤村 作

珍しい事を外國で見出すと如何にも感心なこととして報告するが、我が國の事は、いかに立派な事でも看過してゐることが多い。これは我が國人の癖である、悪い癖である。

扁額の如きその一つである。我が國には扁額に金言名句を書く習慣がある。寒村僻地の旅館などへ行つても、一生味つても味ひきれず、一生實行しても實行し盡くせぬやうな尊い金言名句を見出すことは決して稀なことでない。それに馴れきつて一顧も與へない邦人の態度は勿體ないことである。

或時余は東郷大將の「熟慮斷行」の四大字を拜見したことがある。さうして余は直ちに日本海海戰當時の大將の心境に想ひ到つて、この四大字の尊さを特に感じたのであつた。「熟慮斷行」實に服膺

一 熟慮斷行

一

扁額は我が國の癖である、悪い癖である。

カニンヘン

シロカシ

フクヨク

ハコウワウ

己中心の判断をなすものである。自己の利益名譽、或は狭い自己の周囲の利益、名譽などにこだはつて、自己の進むべき方向、取るべき道を定めようとする。過失、罪惡は多くはここから起る。ここに熟慮の必要がある。我々は事に當つて第一に正邪善惡適否の判断について思を凝さなければならぬ。私利私情等の拘束を脱してその判断を誤らないやうにしなければならぬ。我が取る道、我が進む方向について、正であり、善であり、適であるといふ確信があつてこそ、斷行の勇氣も百倍するであらう。

次には、判断の結果を實行すべき方法の適否の問題が起る。ここに亦熟慮の必要がある。この熟慮は戦争の前の軍人の熟慮に類するが、それよりも一層複雑なものであることに注意を要する。戦争の目標は唯勝ちにあるが、人生に於ける諸般の實行は、その成否の結果は勿論、その實行なり、その結果なりの周囲に及ぼす影響

モクヒヨウ

カキ

ソウキ

ケキをフミ

タツサヘル

サリヤク
策略

に由つて、その實行の價値が定めらるべきであるから、その實行の方法に關して熟慮を要するのである。

これに就いて余は小さい一の例を想起する。曾て新聞紙上の投書で讀んだことである。或外人が電車に乗つてゐた。その隣に乳飲み兒を伴れた婦人がゐた。子供は母の膝の上に乳を啣みながら、外人の携へたステッキを取らうとした。外人はそれを知つて貸してやつた。幾驛か過ぎてから、外人は下車驛の近づいたことに氣づいて、ステッキを取りかへさうとかゝつた。先づポケットから新聞紙様のものを出して、子供に見せびらかした。子供はそれも欲しくなつて、あいた方の手で受取つたので、第一の手段は失敗した。外人は再びポケットから二枚の紙を取出し、兩方の手に持つて見せびらかした。今度は見事に子供が策略に乗つて、ステッキを棄ててそれを受取らうとした。かくて外人は無事に

ステッキを取りもどして電車を下りて行つたといふことを、さも感心した態度で報告してあつた。

この外人の態度には大いに學ぶべきものがある。ステッキは是非取りかへさねばならない。母親に告げて無理に子供の手から返して貰つても少しも差支はない。併しさうすれば、子供が泣き出すかも知れない、少くも子供の機嫌を悪くする。子供が泣き出せば、母親は困り、乗客達は不快を感じべき筈である。であるから、さうした手段は拙い。外人はそれを考へたから以上のやうな手段を講じた。さうして少しも子供にも無理のない、母親も困らせない、乗客にも不快をおぼえさせない方法を見出して、見事に成功したのである。これは實行の方法に關する熟慮の必要を示す一例である。事は小であるけれども、大きな場合にも適用さるべき尊い事例である。

ヤシツカ
キゲン

熟慮斷行、有り難い金言である。併しこれを服膺するに當つては、先づこれらの點を熟慮しなければならぬ。

二 櫻花

笹川 臨風

櫻は多きがよし。淋しきはその特色に非ず。賑かなるはその本性なり。この點に於て



春の長奈 (筆舟曼村川)

この花の本色とすべし。蓮に厭世の相あり、梅に隱逸の風あり。櫻は樂天的にして、又現世の相をあらはす。



臨風は號
東京の人
文學博士
國史・國文學者

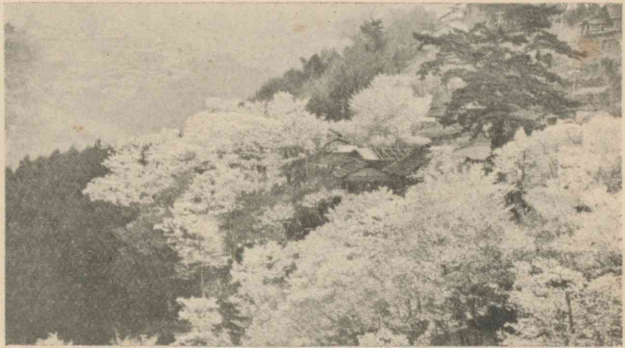
此の櫻は...

ワズカ

コト入り

明治四十三年
（年四十一）

飛鳥淨御原の帝
天武天皇



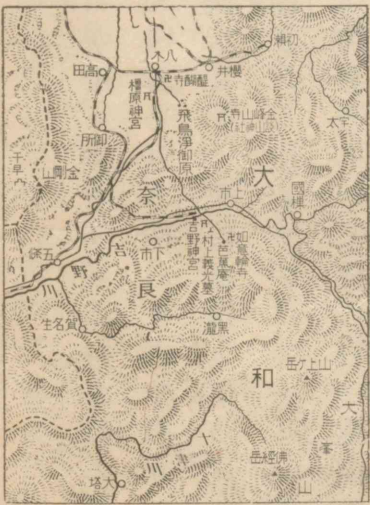
三 吉野山

抑大和は人皇以來最も古く開けし國なれば、從つてこの地も山間の僻地ながら、よく世に知られけらし。南和及び紀伊は木材に富みたる處なれば、それを都に運ぶには、先づこの地に集めけん。年々に大宮に参りて毛の荒物を貢ぎける國栖といふ山人も、この邊りにや住みけん。

世や、

降りては、
虎を野に

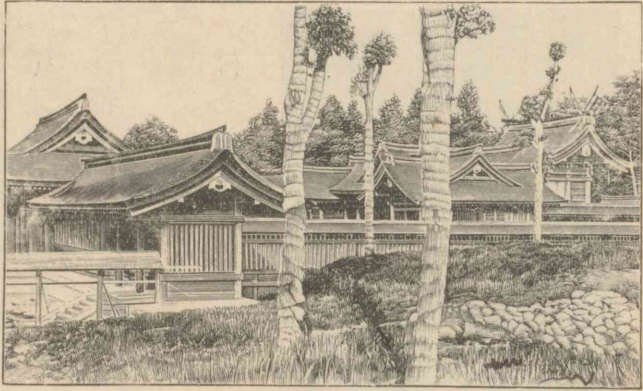
放つと、謠はれ給ひし飛鳥淨御原の帝が世を避けて風雲に乗ぜん勢を養ひ給ひし處。天女が天降



吉野山地方地圖

ヒレガヘレ

源廷尉
源義經



り袖翻し舞ひて大御心を慰め奉りしといふ五節の舞の起原は、袖振山にその名を留めたり。葛城の神を役して大峰を開きたりといふ役行者は熊野よりわけ入り、醍醐寺の開祖たる聖吉實僧正は、ここより大峰に分け入りしな野るべし。爾來大峰を奥院とし、吉野を本神院として、参詣する者跡を絶たず。金峰宮山寺の山僧は南都北嶺と肩を比べぬ。源廷尉が昨日に變る今日の恨、屋島に寵臣の兄を失ひしは、痛ましけれど勝利に誇りし時なり、今その弟を失ふ失意落膽の時、英雄の涙そも如何なりけん。その後數世、建武中興の政亂れて、吉野朝五十七年、かゝる山中を都と定め給ひけるよ。花咲き

三 吉野山

二

花散る時、聖帝の思、月盈ち月虧くる時、百官の涙、かかる哀れは古は
見ざるところ、後の世にもまた有りなんや。

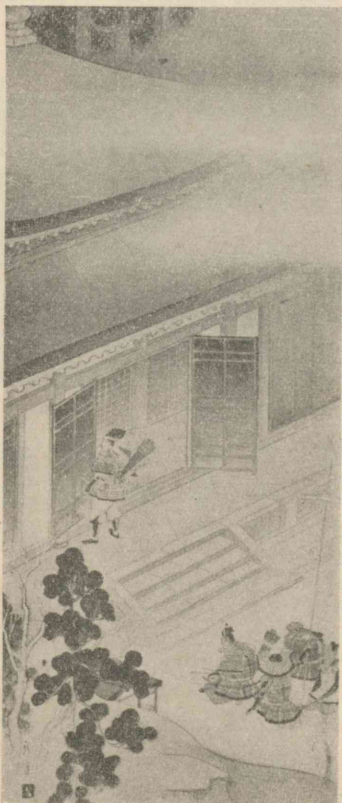
延元帝
後醍醐天皇

延元帝の御製に、

都だに淋しかりしを雲はれぬ

吉野の奥のさみだれの空

村上義光は大塔宮に代りて骨を櫻の蔭に埋め、楠木正行は君に



寺輪意如 (筆 涯龍藤伊)

寵兒豊太閤は將卒妻子を率ゐて此處に豪遊し、盃を舉げて花に對

名残を惜しみ
て雲の中より
出づ。草木無
情春に榮ゆる
ことその後幾
度ぞ。運命の

花より外に

もろともにあは
れと思へ山櫻花
より外に知る人
もなし

やがて出でじと

吉野山やがて出
てじと思ふ身を
花散りなばと人
や待つらん

鈴の屋

本居宣長

貞室

安原氏
名は正章
俳人

支考

延寶元年歿
各稱氏
美濃の人

蕉門十哲の一人
享保十六年歿

し氣を吐くこと千丈、古の英雄が失敗の迹をや笑ひけん。

大僧正行尊は、花より外に知る人もなし。と知己の得難きを恨み、
西行法師は、やがて出でじと思ふ身を。と言ひて、妄語の誹をや得け
ん。獨天下の名所を探る蕉翁が風流、母に侍して一生の望足れり
とする山陽が孝行。その名所を記すること質にして要を得たる
は益軒が筆、鈴の屋が菅笠日記なども永く人に忘れられざらん。
一句にして吉野を盡くせるもの、名所としては貞室が

これはこれとはばかり花の吉野山

舊跡としては、支考が

歌書よりも軍書に悲し吉野山

などあり。かばかり名だたる地にして、古人の筆の至れり盡くせ
るを、今更にわれらが幼き筆に何をか言はん、何をか記さん。

— 東圃遺稿 —

四 自動車王フォード

私語

「この子は器械や道具といつたら、目がないでございますよ。」
若いヘンリーの母親は、よく附近の人にこんなことをいつた。
それは出来のいゝ自分の息子に對する母親らしい誇りもあるに
は違ひなかつたけれども、また實際、それほどヘンリーは道具や器
械が好きであつた。彼は両親から金を貰ふと、それで必ず鑿や鉋
や鋸などを買つた。

彼は近頃出版した「私の生涯と仕事」に於て、「その頃は今のやうな
玩具はなかつた。私共の玩具といふのは、大概家庭で造つたもの
である。私の玩具は機械道具であつた。……そして今もなほさ
うである。私には、その機械道具の一片すらが寶であつた。」と告白
してゐるのでも、彼の機械道具に對する執着を知ることが出来る

であらう。

彼の家は百姓であつた。大變な貧乏といふのではなかつたに
しても、水呑百姓の範圍を出ては
なかつた。

「馬がなくて開墾の出来る車が發
明されたといふぜ。」

或日、ヘンリーの友人はこんな話
をした。その車はなんでも水蒸氣
で自然に廻つて仕事をするといふ
のである。車といふと、すぐ馬と結
び合はせて考へる當時にあつては、
蠻人が飛行機を見たほどの珍らし



場工のそとドーフ

い話であつた。

デトロイト
アメリカ合衆國
ミシガン州
エリー湖の西方
にある都會

「見たいな、その馬無し車を見たいな。」

ヘンリーは毎日さう考へた。或日彼はデトロイトに行つてそれを見た。それは彼の十二歳の時であつた。

「ア、動いてゐる！ア、蒸氣が出てゐる！」

彼は、田舎者が淺草の活動寫眞でも見るやうな喜と驚異とを以てこの「馬無し車」を見た。そしてこくめいにその機械やら運轉の方法やらに就いて運轉手に聞いた。その瞬間に、彼の頭には稻妻のやうに一つの考が閃いた。それは、人間が乗つて道を歩ける「馬なし車」の完成である。

「お前は百姓になつた方が一番いゝよ。お父さんの後を繼いでさ。機械技手などはつまらんよ。」

ヘンリーが機械の研究に身を投じようとする毎に、彼の父親はかういつては反對した。彼は表面、この父の言葉に背かなかつた

けれども、併し彼の興味が百姓になくて機械に走りつゝあるのを自分自身どうすることも出来なかつた。

彼自ら書いたものによると、彼は十三歳の時に時計の崩れたのを拾つて来て、それを修繕して動くやうにした。十五歳の時に、時計ならどんなものを持つて来て、立派に直し上げることが出来た。誰からも教はらず、自分が造つた粗末な機械で精巧な仕事を仕上げるこの少年に、友人も先生も舌を捲いたのである。

十七歳の時、彼が小學校を出る頃になると、父親はもう根負けして居た。ヘンリーは父親の同意を得て、機械工場の見習に入つた。晝はそこで働いて、晩は時計の修繕工場に通つた。

「一時時計屋を始めようと思つたけれども、時計はどうしても一般的でないからよした。最大多數の人間を目がける仕事、それが私のねらつてゐたものだ。」

修繕工場 繼鷲果

彼はその當時を回顧してかう言つてゐる。彼の着眼は何時でも大きかつた。



部一の場工ドーフ

忍べるだけ忍んで來た大統領ウイルソンの堪忍袋の緒が切れて、米國といふ偉大な巨體が大戦争の渦中に飛び込んだ時であつた。召に應じてフォードの瘦せた身體は、政府の宏大な建物の應接間の中に役人と相對して見えた。

「自動車やトラックや、その他のものが至急に要るんですが、最初の貨車を送り出すのにどの位の時間が必要でせうか。」

大戦争
西紀一九一四年
に始まつた世界
大戦

役人は思ひつめたやうにかう聞いた。

「只今御話の分は、明日午後三時までには皆お渡しを完了します。」

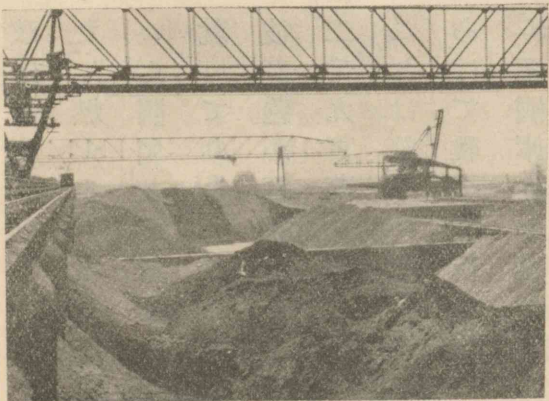
次の御注文は五分間づゝあつたら十分です。」

フォードは午後のお茶でも呑むやうな平靜さで答へた。

彼の言ふ事に一分の違もなかつた。あの戦争の間、彼の工場からは機械のやうに規則正しく自動車流れ出た。そして聯合國側をして十二分にその實力を發揮させることが出來た。

「ヘンリーフォードですがお役人にお目にかゝり度い。」

戦争が終つて後フォードの姿がもう一度役所の玄關に現れた。



部一の場工ドーフ

四

「あなたのお蔭で、米國政府はどれだけ助かったかわかりません。厚くお禮を申します。」

政府の高臣は、フォードの顔を見るなり、かういつて固く手を握つた。燃えるやうな感謝の念は、その熱心な顔色にも觀取された。

「いえ國民としてなごなければならぬことをなしたただけです。就いては、今日は一寸御手敷を煩はしに來たのですが……。」

彼が靴から取出したのは、一枚の銀行小切手であつた。それには二千九百萬ドルと書いてあつた。

「これは、戰爭中政府の御注文をいたゞいて得た利益です。國をあげて戦つてゐる時に、私だけが儲ける理由はありません。どうぞ國庫にお納め下さるやうお手續を願ひます。」

「これを政府に……御厚意は感謝に堪へませんが、あなたのとこの品物はそれでなくても廉いのですから、正當な報酬として

お受けになつて少しも差支ないと思ひますが。」

「私の良心の命令です。どうぞ何分のお取計ひを願ひます。」

フォードの飾らない誠意を見て、政府の高官の頭は自然に下つた。
—清澤冽の文に據る—

〇 五 ふるさとの山

石川啄木

石川啄木



名は一
岩手縣の人
歌人
明治四十五年歿
(年二十七)

ふるさとの山に向ひて

言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな

歌
啄木、山に向ひて言ふことなし、
自然、ふるさとの山はありがたきかな、
心、初らば、
物、皆、不、
心、初らば、
心、初らば、

汽車の窓

はるかに北にふるさとの山見え來れば
襟を正すも

今日もまた胞子病あり

死ぬなば

ふるさとに行きて死なむと母の

懐郷の気が迫る歌

理屋根

かにかくに濫民村は戀しかり

おもひ出の山

おもひ出の川

コサヤノ

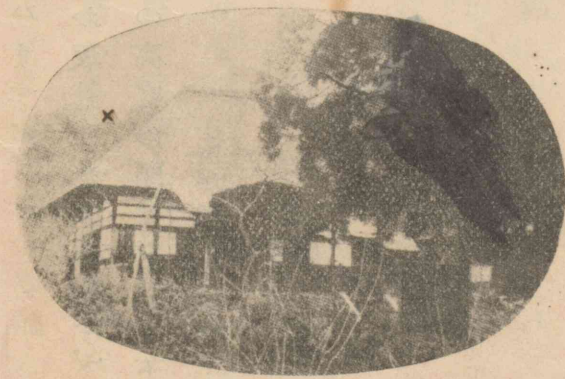
その昔小學校の^{コサヤノ}根に

我が投げし^{コサヤノ}鞠 由心堂

いかにかなりけむ

コリ

ふるさとの



家生の木啄の村民遊

コバウ

かの路傍のすて石よ

今年も草に埋もれしならむ

ふと思ふ

ふるさとに居て日毎聴きし雀の鳴くを

三年聴かざり

なつかしき

故郷にかへる思ひあり

久し振りにて汽車に乗りしに

何事も思ふことなく

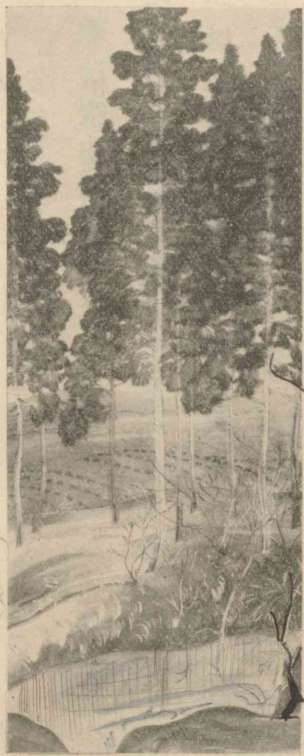
いそがしく

モリガト

カ

フリカツ
慌

つちでもこつちでもくゝと鳴きだす事がある。空から射す日の光はそろ／＼と熱度を増して、土はそれを幾らでも吸うて止めぬ。土は凡てを段々と刺激して、堀の邊には、蘆や、とだしばやその他の草が相映じて、すつきりとその首を擡げる。軟かさに満たさ



春 早 (筆月 弦澤 矢)

な花粉を撒散らして居る。蛙は假死の状態から離れて、軟かな草の上に手を突いては驚いたやうな様子をして空を仰いで見る。さうして、彼等は慌てたやうな聲を放つて、その長い睡眠から復活したことを空に向つて告げる。それで遠く聞く時は、彼等の騒が

ハワキ

タスタ

カレン

カウヨリ

しい聲は只空にのみ響いて快げである。

彼等は更に春の到つたことを一切の生物に向つて知らせる。

草や木が心づいてその活力を存分に發揮するのを見ないうちには、鳴くことを止めまいと力める。田圃の榛の木はとうに花を捨てて、自分が先に嫩葉の姿になつて見せる。黄色みを含んだ嫩葉が、爽かて且朗かな朝日を浴びて、快い光を保ちながら、蒼い空の下に、まだ猶豫うて居る周囲の林を見る。岬のやうな形に偃うて居る水田を抱へて、周囲の林は漸くその本性のまに、勝手に白つぼいのや黄色つぼいのや種々に茂つて、それが氣が付いた時に、急いで一つの深い緑に成るのである。雑木林の其處ら此處らに散在して居る開墾地の麥も、すつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黒い瞳を聚めて、羞づかしさうに葉の間からこつそり四方を覗く。雑木林の間には又、芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。その麥

しつらつせかろく

ヌアメン

ユラれる

となつて、田圃の短い草にごろりと横になる。さうして、蛙はひつそりと静かな夜になると、如何に自分の聲が遠く且遙に響くかを矜るものの如く、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢる時、蛙の聲はめつきり遠く隔つて、それがぐつたりと疲れた耳をくすぐつて、百姓のすべてを安らかな眠に誘ふのである。熟睡する事によつて、百姓は皆短い時間に肉體の消耗を恢復する。彼等が雨戸の隙間から射す夜明の白い光に驚いて、蒲團を蹴つて外に出ると、今更のやうに耳に迫る蛙の聲に、その覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に全く朝の元氣を喚返すのである。草木は遠く遙に響けと鳴くその聲に撼られつゝ、夜の間には生長する。櫟や檜やその他の雑木は、蛙が鳴けば鳴く程、さうしてそれが鳴き止む季節までは幾らでも繁茂することを繼續しようとする。其處には毛蟲その他のあさましい損害が或は有るにしても、しとくと屢、梢を打つ雨が空の蒼

さを移したかと思ふやうに、力強い深い緑が地上を掩うて、爽かな涼しい蔭を作るのである。

七 菖蒲ふく頃

島崎藤村



島崎藤村
名は春樹
長野縣の人
文學者

國民の記念日でもなく、氏神の祭禮でもなく、卯月八日の花祭とか、暮のクリスマスとかのやうな宗教の意味のある祭日ではないが、一年に二度の節供の祝が、ただただ幼いもののためにあるのはうれしい。女の兒のためには三月の桃の節供、男の兒のためには五月の菖蒲の節供があるのはうれしい。五月人形の多くが武勇を誇りとした舊い時代からの遺物であるといふやうな、さういふ理窟は抜きにしたい。そこに飾られる一切のものは皆玩具だ。あの三月の節供に取出されて、今にも合唱でも始めさうな雛や、古風な少年音楽隊のやうな五人ばやしの

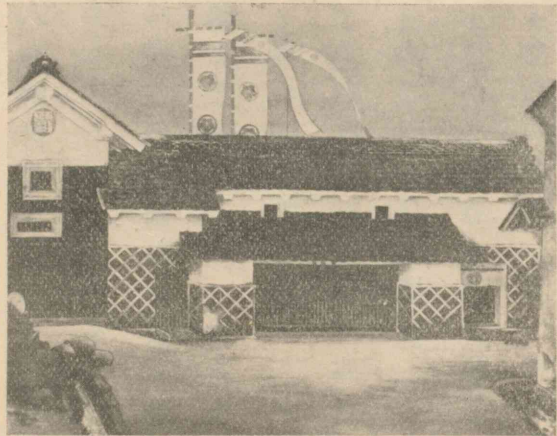
かはりに、五月の節供を祝ふためにあるものは、鍾馗と、鬼と、金時と、桃太郎などの行列だ。五月の空に高くひるがへる鯉幟はあたかも子供の國をそこに打建てたかのやうにも見える。狭苦しい町の中にあつても、あちこち屋根の上に鯉幟を望むのは楽しい。鱗を描いた魚の形、長い尾、大きな眼、空にかゝる金と赤と黒とのあの色彩、動きを悦ぶ子供の心を楽しませるやうなあの飛揚。大人の心をも子供にかへすものは、あのはたはたと風に鳴る鯉幟の音だ。五月の節供を祝ふものは、室内にも屋外にもあつて、軒にふく菖蒲までがお伽噺の情調を誘ふもなつかしい。



(筆邦惟本橋)

馗鍾

五月の節供を迎へる頃は、何と言つても季節の感じが深い。桃櫻は過ぎ去り、椿や木蓮にも遅く、山吹と藤と満天星などの花の香



(筆雄綱邊渡)

五月 氣を放つ五月のはじめは、一年のうち最も楽しい季節の一つだ。遠い山々にはまだ雪を見る日があつて、雨でも降れば裕では寒いこともあるやうな、この大震災後の都會へ生氣をそそぎ入れるのも、町々に見る新しい緑だ。私達の周囲は最早若葉の世界だ。この好い時候に楽しい菖蒲の節供がやつて来る。

桃の花が少女にふさはしいやうに、菖蒲はおのづから男の兒にふさはしい。一ふし鋭いところのある葉の形もいゝ。爽かてみ

づみづしい葉の色も好ましい。あれを軒にかけるといふことも、優しい風俗だと思ふ。一年に一度の菖蒲湯があつて、あの香氣が人を酔はせるばかりでなく、私達の身をも心をも温めてくれるのもうれしい。青々とした菖蒲の浮いてゐる中をかきわけて、湯槽に浸るのも楽しみだし、あの葉が肌へべたりと附いた時の心持も悪くない。

奥の細道に曰く、

「名取川を渡りて仙臺に入る。あやめふく日なり。旅宿を求めて四五日逗留す。こゝに畫工加右衛門といふものあり、いささか心あるものと聞きて知る人になる。このもの年頃さだかならぬ名所を考へ置き侍ればとて、一日案内す。なほ松島鹽釜のところどころ畫にかきて贈る。且つ、紺の染緒つけたる草鞋二足^{はな、ひ}餞す。さればこそ風流のしれもの、爰に至り

奥の細道
松尾芭蕉の作
奥羽地方の紀行
名取川
宮城縣仙臺市の
南を流れる川

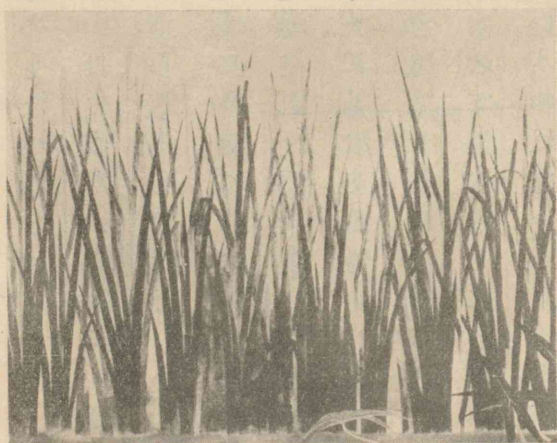
てその實をあらはす。」

五月の節供といふと、この道の記の一節が私の胸へ浮かんで來

る。

あやめ草足に結ばん草鞋の緒

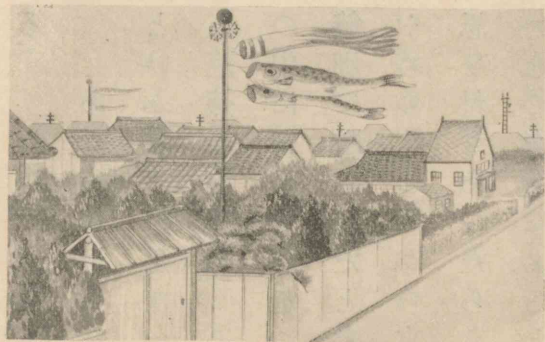
といふ私の好きな句は、その時に残した芭蕉の旅情だ。あの道の記の文句の中に、紺の染緒をつけた草鞋二足を餞別に贈られたとあるのは、折柄のあやめの花の色から來た仙臺の畫家の思ひ付であつたらう。その道に精しい人の考證によると、「奥の細道」の旅は前後百六十日、およそ六百里の行程とある。そんな長途の雨風にもまれ、草臥れて旅宿に辿り着いた頃に、あやめふく季節にめぐり



(筆牛土村奥)

菖 蒲

あつたといふ昔の人の旅の心の深さを、私達の胸に描いて見るのも懐かしい。子供の友達であつたやうな昔の人を、この祝の日に思出して見るのもなつかしい。



鯉 織

粽の香は幼い日の香だ。粽ばかりは鄙びたところ田舎めなに造られるものほど好い。あの細長い粽の葉の巻きつけてあるのを解いて、青い色に蒸された香を嗅いだ子供の頃の心持は今だに忘れられない。粽の外に、柏餅、赤の御飯などと数へて来ると、五月の節供を祝ふもので何がなしになつかしい思を誘はないものはない。私達少年時代は、まだ軒の菖蒲にも残つてゐるやうな氣がする。

この節供を祝ふために、私の家の近所にも大きな幟竿が立つた。



救水
キオリ

定期試験

八 山上の湖へ

八 山上の湖へ

若山 救水

矢の形をした風車を竿の先につけたやつで、青葉に埋められた谷底のやうな私の家の前あたりからは、高く見上げるやうな位置にある。きのふの夕方、私はそこいらを歩き廻りに行つて、坂の下まで歸つて来ると、隣家の男の兒が、お婆さんの背中につかまりながら、ちつと岡の上の風車の動くのを見つめてゐるのに逢つた。私はまたその男の兒の顔を見まもりながら、しばらくそこに立つてゐた。漸く數へ歳二つにしかならないやうな幼い子供にも、そんなに眼に映るものがあるといふことは、ある深い印象を私に與へた。

—藤村讀本—

前橋から赤城の麓を廻り、澁川で乗換へて伊香保に向つた。この邊は、今年の秋、利根の上流へ行つた時通つた記憶がまだ新しい。

名は繁
宮崎縣の人
歌人
昭和三年歿(年
四十四)

澁川から伊香保まで登つてゆく歩みの遅い電車の左右は、全く若葉の世界である。東京附近よりは一月近くも季節が後れるらしく、若葉の色もまだ柔かた、間々、藤の花が見え、山畑の隅には桐が咲いてゐる。

伊香保を足早に通り過ぎた。家並を出はづれると、忽ちに山路になつた。そして深い青葉若葉の茂みの中から、種々様々な鳥の聲が一齊に降つて來た。

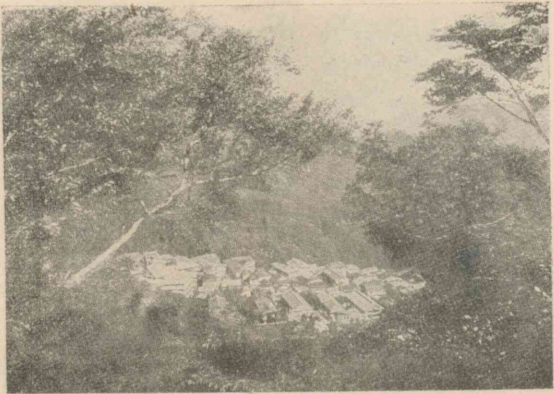
今度無理をして、山へ山へと念じて來たのも、實はこの鳥の聲が聞きたいばかりであつた。私は山深い處に生れて、幼い時からこの深山の鳥の様々な聲に親しんで來た。そしてどうしたものか、春の鳥よりも、秋から冬へかけての鳥の聲よりも、この若葉の頃に啼く鳥に、強く心を惹かれる習慣がついた。初夏の風物は一體に私は好きであるが、眼前の若葉の色を見るにつけ、先づ思ひ出される

イフセイ

心をヒカれる

イモツ

ヨシガへる



伊香保町の

るのは山深く棲む様々な鳥である。昨年も丁度この頃私は山城の比叡山に登つてゐた。十日ほどその山寺に籠りながら、朝夕に啼くその聲々を聞いて、どれだけ私の心を澄まし、魂を休めたであらう。日もささぬ樹立の深い中で、眼を瞑つてそれに耳を傾けてゐると、久しく忘れてゐた自分といふものに、思はずめぐりあつた様な哀しさ、樂しさをしみじみと身に覺えたのであつた。痛い様なその記憶が、この季節と共に、まざまざと私の身に甦つて來た。そして心の渴く様に、ひたすら山が戀ひしくなつたのであつた。その望は先づ達せられた。踏みしめる路は微かな濕りを帯び、見上げる峰、見下ろす谷は、崩え

ホキヨウ
キムヨウ

たつた若葉が渦巻き種々様々の名も知らぬ鳥の諸聲は、ここから溢れ出て私の身を刺すのである。歩調を緩めて歩きながら、私はこの聲に珍しい緊張と満足とを覚えてゐた。併しそれらの小鳥の聲では、私はまだ十分には満足の出来ない何物かを心の中に持つて居た。

若葉の潤葉樹の林は長くは續かなかつた。やがて松や落葉松が、井の字形に植込まれた、まだ年の若い植林地帯にたどりついた。深山らしい小鳥の聲もそれと共に盡きて、とびくの松の梢に頬白鳥の啼くのが聞えた。空は晴れて、燦つた日光が山から山へ射して來た。路は溪と分れて無邊際とも思はれる廣い乾き切つた松林の間に入つたのである。用心のために、前橋の友人から借りて着込んで來た冬シャツや肌着から、後には羽織の裏までも濕る位に汗が湧いて來た。

クヌアツク



公 郭

或眞直な長い坂の中途であつた。ふとある聲が聞えた。立留つて耳を澄ましてゐると、その聲は續いて聞えた。クワックワウークワックワウ。まさしく彼の聲である。

「あ」と思はず息を呑んだ。そして眼を瞠つてその聲の方角をながめると、なだらかに傾斜した山肌が大きく幾つもの起伏して、先から先へと續いてゐる。淡い日光を浴びた若葉は、何となく薄赤みを帯びて唯寂然とひそまつてゐる。寂しい聲は、浅い海の様なその林の何處からか起つて來るのだつた。「あ、あ」私はうめく様に幾度か低い聲を出して、身體のどこからともなく湧いて來る感動を抑へた。そして強ひて心を靜かに保ちながら、白茶けた坂を登つて行つた。

ケイシヤした
ヤコバダ
シヤリヤセン

「ホッタンカケタカ、ホッタンカケタカ」
かうした烈しい啼聲が、また突然私の頭上を通り過ぎた。杜鵑である。しかもつい私の身近に落ちて、その聲は停つた。

「ホッタンカケタカ、ホッタンカケタカ」
やがてまた續いた。よく透かして見れば、その姿も見えさうに思はれる處からである。私はひつそりと路傍の青い草の上に坐り込んだ。



杜鵑

「ホッタンカケタカ、ホッタンカケタカ」

ツウツウ

私は終に仰向けに草の上に身を延ばした。そして雙方の掌をきつく頭の上に置いて眼を閉ぢた。
二つの聲は、一つは近く一つは遠く、時にはかたみはりに時に

ロイロ

は同時に、間斷なしに聞えて來た。何とも言へぬ、**静寂**と光明とが、その聲に聽入つてゐる私の身邊をしつとりと包んだ。山はただその跡の聲のためにかすかに息づき、ひそまり返つてゐる四邊の松の木は、たゞそのためにほのかに光を放つてゐる様子のみに私は思はれて來た。

あゝ、鳥は啼く、鳥は啼く。

ツル

私はまた別の鳥を聞いた。**釣瓶打**に打つ様な、始もなく終もない、やるせないその聲、筒鳥の聲である。

多くの鳥の中で、筒鳥と、郭公と、そして杜鵑と、この三つの鳥は、いつからとなく私の心の中に寂しい巢をくつてゐた。

① 私の心が**空虚**となる時、私の心が渴く時、彼等は啼いた。私の心がさびしい時、あこがれる時、彼等は啼いた。私の心が何かを求めて動く時、疲れてそこに横たはる時、彼等は私と同じ心で、私の心に

クウキョ

そのまことの聲を投げてくれた。
それらの私の心の親友たちは、いま明るい日光にひたされた松の林の、かうしてゐる私の眼の前で、聲を揃へて啼いてゐる。あゝ、まことに啼いてゐる。

私は非常に疲れて起上つた。眩しい日光に何となく差眼し

寄りあひてますぐにたてよ青竹の
やぶのふかみにうぐひすの啼く聲

蹟筆 水牧

を覚えながら、酔つた者のやうにふらくと歩き出した。鳥どもは遠く離れ離れになつてまだ啼いてゐる。一時の興奮の去つた後に聞く彼等の聲は、更にまた別種の寂寥を帯びてそここから聞えて來るのである。疲れては居るものの、私はやゝ足を急がせた。そして程なく意外の光景を見出した。

ジャクリヨウ

とん

伊香保から山上の湖まで二里といふ山路はただひたすらに登るものだとばかり考へてゐた。そしてかれこれ一里餘も來た時、或峠らしい處に達した。急ぎ足にその峠を過ぎようとして、驚いた。思ひがけぬ平原が、かすかな傾斜を保ちながら、廣々と前方に打開けてゐたのである。平原の四方には、四つ五つの鋭い峰が、多くは頂上に岩を露出して各自獨立に聳えてゐた。その中で最も高く見えるのが、形から推して榛名富士と呼ばれる山であらう。この平原は古の大噴火口の跡で、その火口が次第に狭まりながら、幾箇處にも分れて火を噴くやうになり、その一つ一つが峰となつて残り、この榛名富士の一峰が、最後まで活動してゐたのであらう。かういふ火山の形を、私は阿蘇火山に於て見たことがある。阿蘇は現に煙をあげてゐるが、この死火山の頂上に登つて來て、私ははからずもこの平原を見出したのである。原の夏はまだ極めて淺

ツフジ
バラバラ

アイカヤ

心ハ

エイツヤ

いものであつた。白茶けた熊笹が茂り、去年の草の蔭にわづかに青みを見せて雑草が萌え、その間に柏と見える老木が諸處に散在して、漸く芽をふかうとしてゐた。**躑躅**の花が、熊笹や枯草の間に、ただこれだけは鮮かに燃えてゐるやうであるが、これとてもまだ**藿**がちであるらしい。見渡す限りただ**茫漠**たる原の上に、これはまた夥しい雲雀の聲である。よく聞けばその聲は天からばかりでなく、地からも起る。人を怖れぬ山上の雲雀たちは、強ちに蒼天高くまひ昇らずとも、新しいその巢に**籠**りながら、心ゆくばかり各自の歌をうたふことが出来るのであらう。ほんやりと、この景色に見とれてゐた私は、夥しい雲雀の中に混つて聞えて来る郭公の聲を聞いた。首を垂れて聞いてゐると、それはこの廣い野の端の方から起つて來た。煙り渡つた薄雲は、靜かに原一面の上に垂れて、雲に**映射**し、原に照る日も煙のやうであつた。とびくくに立つ

てゐる裸山、その嶺の険しい岩、それらの山に圍まれた大きな窪みをなすこの寂しい原、この原のどこにひそんで彼の鳥は啼くのか。聽入れば、その聲すらも、今はまた煙のごとく原のをちこちを迷うてゐたのである。

原の中央を貫いて、私の歩む路は眞直に續いてゐた。ほんやりと一里近くも歩いて行くと、やがて白い光を帯びて、榛名富士の麓に低く横たはる湖が見えて來た。心靜かに湖の汀を圍んで茂る樹立を眺めてゐると、そこに一軒ここに二軒の人家が立つてゐるのを見出した。それはまさしく、今夜ゆつくりとこの疲れた身體を眠らすべき旅宿である。



湖名榛

—比叡と熊野—

吉田兼好

吉野朝時代の文人
正平五年歿(年六十九)

九 仁和寺の法師

吉田兼好

仁和寺にある法師年よるまで石清水を拜ま
なかつたやいざりければ、心こころよく覺おぼえてあるときおもひたち
徒然て、ただ一人ひとりかちより詣まり詣まり。極樂寺高良な
かたはらのひどを拜みてかばかりと心得て歸りにけり。さ
つて、かたへの人にあひて、年ごろおもひつること
つ果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおは
それしけれ。そも参りたる人ごと山へ登りしは、
なにごとなにごとありけんありけん、ゆかしかりしかど、神へ参
ちるこそ本意なれと思ひて、山までは見ずとぞ言
ひけるひける。すこしの事にも、先達はあらまほしき
ことなりことなり。



石清水を拜ま (繪入徒然草)

アシカサ

カナはて

これも仁和寺の法師、わらはの法師にならんとする名残とて、各、
遊ぶ事ありけるに、酔ひて興に入るあま
り、傍なる足鼎を取りて頭にかづきたれ
ば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめ
て、顔を入れて舞ひいでたるに、満座興に
入ること限なし。

しばし奏でて後抜かんとするに、大か
た抜かれず。酒宴ことさめて、いかかは
せんかと惑ひけり。とかくすれば、首のま
ははりかけて、血垂り、ただはれにはれみち
て、息もつまりければ、打割らんとすれど、
たやすく割れず、ひびきて堪へ難かりければ、叶ははてすべきやうな
く、三足なる角の上に帷子をうちかけて、手を引き杖をつかせて、



鼎法師 (淨一蕙筆)

京なるくすしのがりゐて行きけり。

道すがら、人の怪しみ見ることもかぎりなし。醫師のもとにさし入りて向ひ居たりけん有様、さこそはことやうなりけめ。物を言ふも、くぐもり聲に響きて聞えず。「かゝることは書にも見えず傳へたる教もなし」と言へば、また仁和寺に歸りて、親しきもの、老いたる母など、枕がみに寄りゐて泣き悲しめども、聞くらんともおほえず。

かゝる程に、或者のいふやう、たとひ耳鼻こそきれうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。ただ力を立てて引き給へ。とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて首もちぎるゝばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら抜けにけり。辛き命まうけて、久しくやみ居たりけり。

—徒然草—

一〇 崎人一茶

本 山 荻 舟



メウシユ
オシビ
クレタ
トビ

本山荻舟
名は仲造
岡山縣の人
文學者

柏原

長野縣上水内郡
柏原村

俳諧寺

小林一茶の家の
號

一茶

小林氏

名は彌太郎

信州柏原の人

俳人

文政十年歿（年
六十五）

柏原の名主嘉右衛門がいそぐとして俳諧寺を訪れた。

「すぐにこれから私と一緒に本陣まで来て下され。」

「御用とは何ぢやな。」

「はて大切な御用ぢや。加賀様參觀の御途次、當宿にお泊りなされて、此方の風流をお聞きなされ、是非その發句を見たいとあつて、目通り仰せ付けられたのぢや、何と有難い事ではないか。」

一茶は鼻の先で冷笑しながら、

「折角ぢやが、御免蒙らう。」

「あれまあ、何をいはつしやる。」

「風流に御用はない、また面目にする俳諧でもござらぬわ。宇宙萬物さうした御用で俗化されてしまふのが、私は大嫌なのぢや。」

ク又
ジフツン
メフク

きよとんとしてゐた嘉右衛門は、瞞すに手なしと、

「いやこれは私がわるかつた。御用と言つたはつい何時もの口癖が出たので、加賀様からは入懇のお招きぢや。わざ／＼私の處へお使を下されて、表立つてのお使者では却つて此方が迷惑

飯沼寺

一茶肖像

赤田堂に集



(筆甫泰松村)

茶 一

であらう、どうぞ私からさう言つて懇に同道してくれとお頼みぢや。此方の氣心はよう知つてゐながら、ついあんな事をいつたのは、重々私のあやまりぢや。それが爲若しも此方が来て下さらぬと、私は腹切仕事ぢやから、どうかさういはずに機嫌を直して一寸でも顔を出して下され。」

「あは、腹切仕事はよく出來た。併しそれ程迄にお前様を困ら

オヤシ

せては氣の毒ぢや、念晴しに同道させようよ。」

「やれ有難い。それでやう／＼落着いた。」

「併し衣服は改めぬ尤も改める衣服もないが。この古布子でよからうの。」

嘉右衛門は澁々承知するより外なかつた。

古布子をばつと二三度振つたまゝ、すぐに引懸けて出掛けようとする一茶の袖を嘉右衛門は一寸控へて、

「も一つ私の願ぢやが、何といつても先は百萬石の加賀様ぢや。

此方も何時もの氣性^{こぼん}をやめて、少しは御機嫌取に、體のよいお世辭でもいふ様にして貰へまいか。」

「あは、是は又異なお頼みぢやな。併し外ならぬ名主殿の事ぢや。思ひきつてやりませうよ。」

「有難い／＼。何時もそのやうに素直に言つて下さると、此方も

スナオ

キンヨン

ヒカへて

ヘイコト

「好いお人ぢやがなあ。」

「はゝゝ。お前様も亦、何時もそのやうに腰が低いと、好い名主殿ぢやがなあ。」

一茶は皮肉に笑ひながら、弊衣垢面、^{せむし}僂^{せむし}で跛^{せむし}で醜^{せむし}い姿を恥ぢる色も無く、平然として嘉右衛門と一^{イコト}緒に歩んだ。

柏原の本陣には、梅鉢の紋打った幕を張渡し、盛砂に打水、高張提灯儀容堂々として百萬石の威を示してゐたが、前田侯は案外打寛^{ウチノチカラ}いだ體で一茶を引見した。嘉右衛門は無論御前へは出られなかつた。

「其方が一茶か。よう参つた。豫て風流の名は聞いてゐたが、俳味とはどんな事ぢやの。」

一茶は畏るゝ氣色も無く膝を進めて、「俳諧の道は、孔釋の道と同じでござる。今の俳諧をいふ者は、唯

題を得て發句を作るだけの事。共に談ずるに足りませぬ。」

「左様か。して其方の俳諧はどうぢやの。」

「山水風月、みなこれ俳家生涯のこととござる。心の赴くまゝに發するのが、即ち自然の俳諧でござつて、巧まぬものこそ最も俳

味は濃やかでござらう。尸位素餐の輩に眞の俳諧が解らう道理はご

ざりませぬ。」
人々も是は俳諧の言ふべきや

と、傍若無人の放言に、席に在る者は色を變へたが侯は却つてにこやかに、

「齒に衣着せずよく申した。聞きしに違はぬ其方の器量、予はその意氣が氣に入つたぞ。」

「あはゝ、恐れ入ります。」

筆蹟

一茶
おのれがすがた
にいふ
ひいき目に見て
さへ寒きそぶり
かな

バウ
バウ
バウ

あのみぢや
ひいき目な
さへ寒き
そぶり
かな
一茶

小林一茶筆蹟

「はつ。」

やがて運ばれた膳部に對しても、一茶は何の遠慮もなく心のま
まに酒を飲み肴を荒した。次いで引出物として時服一領を下さ
れた。一茶は一寸考へてゐたが、にこりと笑つて、

「有難く頂戴仕りまする。ではこれでお暇を。」

「左様か、大儀であつたの。」

一茶は御前を下がらうとして、何故かふと躊躇した。

「どう致したか。」

「いや飛んだ事を失念致しました。高貴の御前へ出たら、必ず追
従を申すやうにと折角名主に頼まれて参つたのに、とんと忘れ
て居りました。改めて御世辭を申し上げます。」

と一茶はまじめに、額の汗を拭きながら低頭した。

「は、面白事を申す。その罰として一句吟まぬか。」

子供までのんのうと呼ぶ梅の花。

ハイリョウ
ヒョウリョウ
トウコウ

一茶としては珍らしく如才のない句であつた。上首尾で本陣
を出た一茶は、拜領の衣服を抱へて、別に嬉しい顔もせず、例の怪し
い足どりて飄々と庵室へ立歸つた。庵に入ると、さつそく硯を引
寄せて、塵紙を伸ばし、秃筆を嚙んで

何のその百萬石も笹の露

と書いて見せた。門人は顔を見合はせた。

—名人畸人—

一一 一茶の俳句

相馬御風



名は昌治
新潟縣の人
文學者

一茶は六歳にして既に句を詠んだと自ら記してゐる。

親のなつ子は遊ばせしむるに
おれと来て遊べや親のない雀

これは三歳にして慈母に死なれ、祖母の手一つで育てられてゐ
たあはれな母なし子の淋しさのおのづからなる表現であらうが、

而も全く驚嘆に値する立派な藝術的表現である。

おれと来て

あそべや

親のない雀

近年童謡といふ名の下に兒童の詩的表現が大いに尊重され、
勵されてゐるがそれにしても今日これだけの秀れた作を見出す
ことは決して容易ではない。

そればかりでなく、この一句に現れてゐる六歳の母なし子彌太
郎の詩情が、最後まで一茶の俳句の一面の特色をなしてゐるこ
とは一層興味深い事實である。

瘦蛙負けるな一茶是にあり
やれ打つな蠅が手をする足をする
行け螢とくく人の呼ぶうちに

蚤どもが嘸夜長だろ淋しかろ
雀の子そこのけそこのけお馬が通る
寝返りをするぞそこのけきりくす
蝸牛壁をこはして遊ばせん

こんな風に、小さな弱い動物に對する温かな思ひやりの表現が、

蛙
きん
瘦かへるまける
一茶是にあり

一茶筆蹟

一茶の句に於ける一つの顯著な特色をなしてゐるのであるが、そ
れが既に七歳の彌太郎の雀子の吟に於て、いみじき表現を得てゐ
たことは、まことに驚嘆すべきである。

ところが更に私の面白く思ふことは、一茶にさうしたやさしい
しみじみした一面があつたと共に、他面に於て次の句に現れてゐ

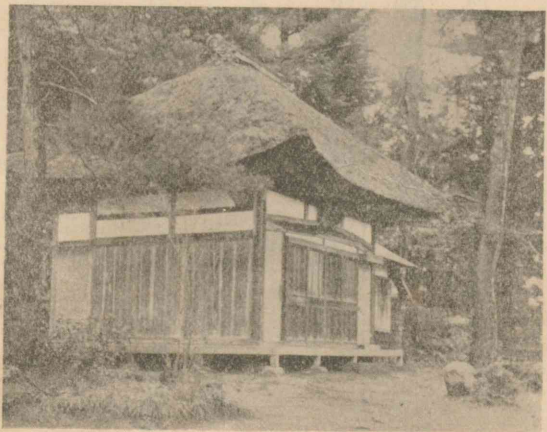
筆蹟
蛙たゝかひ
瘦かえるまける
一茶是にあり
俳諧寺

るやうな皮肉なところもあつたことである。

風を捻り潰さんことのいたはしくあり、又門にすてて斷食さするも見るに忍びざる折柄、御佛の鬼の母にあてがひ給ふものをふと思ひ出して、

わが味の柘榴へ這はす風かな

昔から柘榴の實には人肉の味があると言ひ傳へられてゐる。そこで一茶は或時自分の體にたかつてゐる風を捉へて「きさま、おれの肉を食ふ代りに同じ味のする柘榴の實でも食つてゐろ」といつたやうな工合にそれを柘榴の木に匍はせてやつたといふのである。いかに柘榴の實に人肉の味があるといふ傳説が



寺 詣 俳

あらうとも、風が柘榴の實なんか食つて生きて行かれないことは、一茶と雖もよく知つてゐたに違ひない。しかも、一方に潰す事をいたはしく思ひ、さうかといつて外へすて、斷食させることも見るに忍びないことだと思ひながらも、それを柘榴の木に這はせて興がつてゐる。時々さうした皮肉な冷やかな微笑を以て物を見ずにゐられなかつたことも、たしかに一茶の一面であつた。

布施東海寺に詣でけるに、鶏どもの迹をしたひぬることの不便さに、門前の家によりて米一合ばかり買ひて、葦蒲公英のほとりにならしけるを、やがて仲間喧嘩をいく所にも始めたり。そのうちに木末より鳩雀ばらんとび來たりて、心しづかにくらひつゝ、鶏の來る時小ばやくもとの梢へ逃げさりぬ。鳩雀は鶏の蹴合ひの長かれかしとや思ふらん、士農工商その外さまさまの

家（ま）ひ、みなかくの通り。

うかり雞は米を食ふ、雞こりを食ふ、こりが伴同けんかせとある。
米蒔も罪ぞよ鶏が蹴合ふぞよ

これは一茶の日記中にしるされたところであるが、初め自分のあとを慕うて来た鶏をふびんと思ふあまり、米を買つて来て蒔き與へて置きながら、その米がもとで鶏が仲間喧嘩を始めたのを面白がつて傍觀したり、鳩や雀が隙をねらつて、心しづかに鶏に與へられた米を喰つてゐるのを追ひもせずに眺めてゐた一茶の心持は面白い。「喧嘩なんかよせ、なぜ仲よく皆で食はないのだ。」といった調子で、その場合鶏に喧嘩を止めさせようと騒ぎ廻つたり、「おいそれは鶏にやつた米だぞ、きさまだちはあつちへ行つてをれ。」といった風にその場合、鳩や雀を追ひまくつたりせず、たゞもう何といふことなしにその場の光



一茶終馬の蔵土



正岡常規

子規は號
松山の人
俳人
明治三十五年歿
(年三十六)

景を眺めてから、士農工商その外さまさまのなりはひ皆かくの通りなどと捨せりふを残してもぞく、その場を立ち去つて行く――そこにもたしかに一茶一流の皮肉な微笑がある。
幼い頃から逆境に處して苦しみ續けて来た一茶には、その苦勞ゆゑに、弱いもの、憐れなものに對する同情も人一倍深かつたのであるが、それと同時に他面に於てさうした皮肉な心もいつとなしに出來上つたのであつた。

――郷土に語る――

一二 若葉

正岡子規

城門を出てをちこちの柳かな
竹垣や雨の山吹土に伏す
夜越して麓に近き蛙かな

舟よせて鳥居を仰ぐ若葉かな
若葉の朝も出づる頃海辺にあり神社の鳥居かを若葉の向より見たり、あまりの美しき用を著して仰ぎ見たり

回顧的 城跡や麥の畑の桐の花

湖上遠望 舟に見る膳所の城下の幟かな

筆蹟 一斗糸瓜の水も間にあはず

履歷 新 一斗糸瓜の水も間にあはず

蹟筆規子岡正

沙手野白 手に満つる蛭うれしや友を呼ぶ

須磨寺のともし火うつる青田かな



畫併の規子



福岡の人 徳川時代の學者 正徳四年歿(年八十五)

第三の石門涼し雲の上

椎の木のしげりて見えぬ上野かな

植ゑ残す水田に朝の靄深し

苔清水馬の口籠をはづしけり

一三 四季の眺

貝原益軒

一 春

花もやうく咲きつゞきて、梅花すでにうつろひて後新なるは、

我が國ならぬ唐桃の花なるべし。桃紅なるは、たなびく雲の面影

のたつ心地す。李白きは消えがての雪の梢に残れるかと見えて

いとうるはし。

櫻の**縦**び出でたるこそ花に心はなけれど人の心を動かしてえ

ならぬ眺なれ。これ我が日の本にて四時の花の多き中にも第一

よしさらば
續古今集(藤原
爲家)



(筆年景尾今)

櫻の
見ものなれば梅
散りて後この頃の
異花は皆けおされ
ぬ。されど日頃待
たせ待たせてやう
やう咲けるが、あく

まで見る程もなく疾く散るは又強らめし。

よしさらば散るまでは見じ山櫻

花のさかりを面かげにして

と古人のよみけんも後の思出にせんとにや情深し。この折から
春雨のしきりに降れば、我が宿の園の櫻は如何にあらんとうしろ
めたし。柳緑に花紅にして春の色を描き出せるはいと麗しき眺
なり。

二 夏

惜しめども
惜しめどもとま
らぬ春もあるも
のをいはぬに來
たる夏衣かな
新古今集(素性
法師)

下等ク
上セト

木陰は何となく寂しげに
心も少しもななく、雑談に
あけり人は花を散らすのまき
にも優れて居る。

空もどろに
五月雨の空もど
ろに杜鵑何を
うしとか夜たぐ
啼くらん 古今
集(紀貫之)

惜しめどもとまらぬ春すてに去りぬれば、よばぬに來たる夏衣
のうら珍しく、今めかしう改れるころほひ、おほかたの空のけしき
心地よげなるに、青葉の梢若やかに、物毎に春に立ちかはりて、又世
異なる有様なるもいとなんめでたき。木陰は何となく寂しげに、
びしからず、閑談にふける人は、繁花にも優れりとす。折待ち得た
る杜鵑の初音まづ、あつかしくて、鶯の啼く音すてに老いたるに代
れる心地ぞすなる。もろこし人は杜鵑の聲きくことを悪めども、
我が日本にては昔よりこれをあはれみて、歌にも多く詠めり。夜
もすがら空もどろに鳴きわたれども、聞く人みなあながまと思
はず。多からぬ所は今一聲だに聞かまほし。又鳴き行く方の人
も待ちなんと思へば、過行くも更に恨むべからず。卯の花の垣根
の雪にまがへるも、ひとりこの月の名をおひて美を専らにすとい

ふべし。およそ卯月のけしきは清く和かにして、空晴れ雨久しく
 降らず、餘寒盡き、日いや永くして暇多ければ、出でて遊ぶによし。
 朝まだき起きて、園をうかがふにも、風暖にしてなやみなければ、日
 日に涉りて見所多く、草も木も皆緑の色をあらはして、各その趣を



杜成せる
 は天地
 の恵を
 享けし
 まにま
 (筆畝秀上池) 鶉

に生ける類より更に私なくして、いぶかしみなくなづさはれぬ。
 卯月はかく空はれやかなれど、やがて[卯月]になりぬれば、大空の
 景色さいつ頃に引きかへてさみだれ久しく續き、折々はなるかみ
 おどろくしくして、降らぬ時だに曇らしく、物のあやめも知らず園



花橘のかをれる
 さつき待つ花橘
 の香をかげば昔
 の人の袖の香ぞ
 する(古今集)
 音もせて
 音もせておもひ
 にもゆる螢こそ
 鳴く蟲よりあ
 はれなりけれ
 源重之

をうかふふべき隙稀にして常にたれこめて日數を經るもわびし。
 夏もやうく深くなりぬれば、木として繁らざるはなく、草とし
 て榮えざるはなく、日々に物を引伸ぶるやうに見えて、ひたすらに
 緑の色深き夏木立こそ、花にもをさし、劣るまじけれ。春の花は
 處々に咲きて稀なり。夏は山も里もあるとしある草木ごとに打
 ちはへて、皆緑の色なれば、春に異なる眺なり。八千草に植ゑ集め
 てなづさひし前栽の草木ども、雨を帯びておのゝその梢をあら
 はし、所得顔に心にまかせて生ひ茂れるもうれしと見ゆ。昔おほ
 ゆる花橘のかをれる夜は、追風もいとなつかし。早苗とる頃、田家
 は雨を待ち得て忙はしく賑はし。この頃、遣水のほとりに飛ぶ螢
 の音もせてすたくを見れば、鳴く蟲よりいと隣むべし。夏山のけ
 しき、青みわたりたる高き峯、大空につらなりて、雲の外に聳えたる
 をあくまで見るこそ、殊にすぐれて心を快くする眺なれ。白樂天

白樂天
支那唐代の詩人

が、眼を放にして青山を見る。といへるが如し。

三 秋

秋來ぬれば、初風涼しく打吹きて、草木のそよぎ、秋の聲のいづこにもうちなびきて聞ゆるこそ、初春の風にかはり、心を傷ましめ身にしみて、金氣あきの至れるしるべと覺ゆれ。きりくすのきざはしのもとにすだくも、折知あきり顔かほに聞えさす。阮籍が懷を詠ぜし詩に「開秋兆涼氣、蟋蟀鳴床帷」といひしも、この頃の景氣をいへるなり。大暑やうやく退き、新涼すてに來りぬれば、恰も酷吏くしの去りて故人のここに來れる心地ぞすなる。この頃は人の形氣力を得て、燈も親しくなりぬれば、古き書ども卷き舒ゆるぶるに時を得て、萬づの樂しみに勝りこよなう面白し。萩の上風、萩の下露さまゝの蟲の音、皆秋のあはれを催して、身にしむこと限りなし。門田の稻葉朝露にうるほひ、夕の風音づれてそよぐけしき、殊更早稻わかしほ、晚禾おそいねの先だち

阮籍
支那晉代の人
竹林七賢の一人

萬づの樂しき書ども卷き舒ぶるに時を得て萬づの樂しみに勝りこよなう面白し

萩ノ下露ヲ先
秋ノ聲トシテ

後れて、穗に出でたる有様、皆見るに堪へたる眺なり。

秋も半ば過ぎ行けば、大空に初雁がねのつらなりて鳴き渡るもまた珍し。春は花とこそいへれ、秋もまた花多かめり。殊更野邊に立てる秋草の名も知らぬ花ども多く、叢に紐とき錦を曝さらすが如く見ゆれば、秋の野いと珍し。秋の花の久しきに堪へて散りがてなるは、春の花の見程もなく、早く散りぬるに勝れり。およそ花のいとけやけきは、春は梅櫻李、海棠など木々の花多きは、陽氣はまづ空に昇れる故にや。秋は萩女郎花、尾花、葛花、撫子、藤袴、朝顔、この七草の外、桔梗、龍膽などくさくの花猶も多



(筆 観 千 倉 郷)

饒 豊

春は唯一つ草と
緑なる一つ草と
ぞ春は見し秋は
色々の花にぞあ
りける(古今集)

あり。秋はまづ陰氣下へ降れる故ならずや。撫子、春は唯一つ草とのみ見ゆれど、夏より咲きそめて、秋の色をあらはせるは、唐の日本たふのいろくの花ぞ咲くめる。長月の頃は、秋の花も過ぎ紅葉もまだしき折なるに、菊は百花に後れてひとり晩節を保ち、霜に誇りて操の色をあらはし、すべての花に時を異にするのみならず、色形句ともに殊にすぐれて、あやびかなれば、この時もし花多くともわきてあはれむべきに、秋の末にひとり盛なれば折にあひていとめでたし。

四 冬

すこし春ある心地

冬も来ぬれば今朝より馴るゝ埋火のもと、やうく立ち離れ難し。露と霜とおきかはし、紅葉色濃く、木々の梢、浅茅あさちが原も冬枯の景色となり、面がはりするも秋にことなる眺なり。神無月の時雨も過ぎて日暖なれば、すこし春ある心地す。むべこの月を小春と

空さむみ花にま
がへて散る雪に
すこし春ある心
地こそすれ(枕
草子)
木の葉降りて
冬の来て山もあ
らには木の葉降
り残る松さへ峯
にさびしき(新
古今集)

ぞいへる。されど一の日二の日やうやくかさなれば、風氣いよいよはげしく、木の葉降りて山もあらはに見え、残れる松も峯にさびし。春夏秋の艶なる景色、よそほしかりつる有様、皆この時に至りて盡きぬれば、殊の外にもかはれる空かなと、目驚かされぬ。日ごろ雪いみじう降りて、いかに積りたる曉は、山も里もひたすら銀世界となりて、世かはり景色異なる有様なり。冬ごもりせし梢の枯れたるも、再び花咲けるが如し。殊更冬の澄める月に、雪の光りあひたる空こそ、見る人なくひとり身にしみてあはれも深けれ。空霽れて後まで、友待つばかり處々消え残り



(筆 畝 秀 上 池)

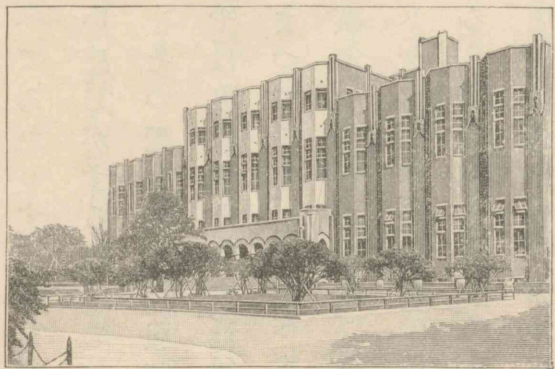
なことは僕自身にだつてわからない。ただ一時の氣まぐれに過ぎなかつたんだね。

そこで僕は或晩用意しておいた道具をマントの下に忍ばせて、この池の縁までやつて来た。道具といふのは、大きな釣針を疊絲でステッキの先に結びつけたもの、みゞず一匹、大きな竹の筒、風呂敷一枚、それだけなんだ。僕の考へでは、鯉を一尾釣り上げたら、それを竹の筒の中に入れて動かないやうにし、上から風呂敷に包んで、門衛の眼をくらませながら、うまく持ち出すつもりだつた。

丁度今頃のことだつた。新緑の香の籠つた夜氣を吸ひながら、僕はあの大木の岩の上に腰を下して、黒々とした池の中に釣を垂れたものなんだ。

一時間ばかりは何の手筈へもなかつた。僕はもう駄目かと思つて、夜中禁制の釣をしてゐる自分のことが、變に馬鹿馬鹿しくな

つてきて、取止めもない空想に耽りだした。所が、ふいに……素敵だつたよ、馬鹿に強くぐいと糸を引つ張るものがあるぢやないか。



(在現) 館書圖

はつと思つて、腰を浮かしざまに、力一杯引上げてやつた……そいつが、夜目にはつきりと分らないが、二尺ほどあろうといふ大鯉で、水際を離れようといふ瀬戸際に、尾鰭で一跳ねやつたために、僕は思はずよろ／＼として、滑りかけた片足を宙に浮かせたまま、ステッキの釣竿を抛り出し、両手で岩角につかまつて、池に落ちることだけは免れた。

漸く我に返つてから、僕は釣竿を探してみた。然し池の面は薄暗い闇に包まれて、さつぱり見當がつかない。僕は自分も失敗に

苦笑しながら竹筒と風呂敷とを抱へて、すごくと歸つていつた。図書館の窓が明々と輝いてゐたり、門衛が永遠の彫像のやうに控へてゐたりするのを、僕は横目にちらと見やりながら、變に薄ら寒い感じがするのであつた。

その翌日、僕は制服制帽で何喰はぬ顔をして學校に出た。だがやはり氣になつて、池の方へ行つてみると、十人ばかりの學生が集まつてゐる。ステッキが動く、ステッキが動く……と言つて不思議がつてゐるのだ。見るとなるほど、前晚僕が釣竿に用ゐた籐のステッキが、池の眞ん中に浮いて、前後左右に狂ふが如く動いてゐる。時々靜まるかと思ふとまたぐいぐいと動き出す……ははんと僕は思つた。が、どうにも仕様がなかつた。

それから變な日が續いた。池の面にはいつも籐のステッキが浮いてゐて、それがどこかの隅にぢつとじてゐることもあるし、あの小島のまはりをぐるぐる廻つてゐることもあるし、また前後左右に動き廻つてゐることもある。そのステッキの先の丈夫な壘絲には、大きな釣針がついてゐて、それを鯉は腹の中までも吞込んでゐるに違ひないのだ。僕はそれを思ふと、氣持が苛立つてきて、しまひには神経衰弱になりかゝつた。然し池の面はいつも平靜で、水蓮の花が咲きかけるし、緑の樹影を映じてゐる。不思議なステッキも大して人の注意を惹かず、それを始終問題にしてゐるのは、恐らく僕と鯉とだけだつたらう。

そのうちに、ステッキは水面に見えなくなつてしまつた。僕は夏の休暇に旅をした。凡てが時のうちに呑みこまれて忘れられた。

そしてその冬の或る寒い朝の事だ。池の面に氷がはりつめてスケートさへ出來さうに思へたので、僕は何氣なく、氷の上を恐る

恐る歩いてみた。すると、その岸邊の塵芥の中に、僕の例のステッキが轉がつてゐるのだ。氷を碎いて拾ひ上げると、浅い水底の泥の中から、ステッキについて墨糸がずる／＼出て来て、その先に、泥まみれの魚の頭の骸骨がくつついてゐる……。



僕はその骸骨を池の縁に埋めてやつて、その上にステッキを立てて置いた。然しいつのまにか、その籐のステッキはなくなり、その場所さへも分らなくなつてしまつた。もう十年も前の話なんだ。然しかうして今池を眺めてゐると、その水面に籐のステッキが浮かんできて、それが彼方此方に動きさうな氣がするのだ。憂鬱なお伽噺の世界だね。

私はN君のその話を、今迄誰にも語らなかつたが、ふと文字に書き残す氣になつたのである。大木の茂みとその間から隠見する文科大學のゴシックの横顔、さうした風景も地震のために壊されてしまつて、あの古池と不調和な建物が周圍に並ぶことだらうし、また、この話を聞いて面白く思ひさうな、ハーン先生やケーベル先生のやうな人も、再び大學に現れさうにないから、せめて文字に書き残しておくのである。

—東京帝國大學新聞—

一五 地下鐵道に乗る

いはば土中に埋めた鐵管の中にあるやうなのがこの地下鐵道で、大震災の時、もしこれがあつたなら、死亡者の何分の一かは安全に助かつてゐただらうといふことだ。さう安心しながら、簡素な舞臺装置に似たあどけないうへの驛入口を降りて行く。船腹の

高島千相才

やうに板を張つたトンネルに晝の電燈が並んでゐる。地下二丈二尺の温氣がむつと来る。

十錢白銅を入れると、マグネチックな力が働いて、ターンスタイルが一廻轉する。これはうちから押せばいくらでも廻轉するといふ仕掛だ。面白がつて押廻しながら皆が通過する。面倒臭い切符なしですむのが有難い。回数券を持つた人のためにはパッシメーターがある。



(驛野上)口入道鐵下地

黄に塗りつぶしたカアだ。間接照明

の光が車内に柔かい。珍しまぎれに乗込んだ大勢の乗客は、皆車の内外を見廻してゐる。子供は口にくはへた指の間から「地下鐵」

カア
電車
好意心
カア

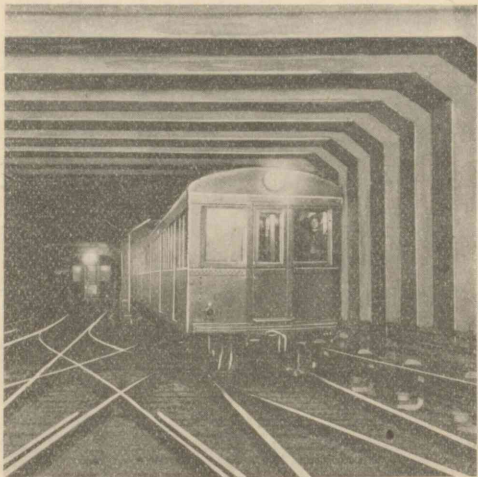
十錢白銅を云々
昭和四年頃のことにして現在では切符を買ふ制度に改められてゐる
マグネチック
磁氣性の
ターンスタイル
廻轉式に人の出入を制する木廻轉木戸
パッシメーター
回数計算器

を繰返してゐる。一九二八年の三歳の子供は、四十二歳の母親と同じ最初の地下鐵の經驗をしてゐるのだ。

毎日汲出すといふレールの間の溝に澱んだ水を眺めてゐると、向ふからカアがやつて來た。それが停ると、警笛を鳴らして、無愛想なセメントの壁の中を走り出した。隧道の天井の灯が、こぼれるやうに車窓の上部から掠めて過ぎる。

驛々には薬やキネマや醤油などの廣告が、生々しいセメントの

匂に、すさんだ薄闇の地下道に、色彩的の興味を與へてゐる。商業主義の廣告でさへ、こゝだけではたつた一つの藝術品だ。「いなり



部内道鐵下地

色調を發散する。

ちやう「たはらまち」あさくさと突進してゆく先々で、それらは快い
 色調を發散する。
 我々の頭上の大地では、軍隊が行進してゐるかもしれない。積
 み過ぎた貨物自動車ジキが撓つて走つてゐる
 かもしれない。どんなすばらしい出來事
 がいつ起るかも知れない。けれどもそん
 なことには白痴の如く無關心な世界がこ
 こにある。全線一杆六分、ゆつくり走つて
 五分間の間は、少くとも我々は現實世界か
 ら遊離して、ソロモンの壺ソロモンの壺にでも封じ込ま
 れてゐるやうな妖精じみた感觸を全身に
 感じながら、はるかに知らぬ世界を旅行してゐるのだ。
 換氣装置を二つ數へたらもう淺草だ。自動式ドアは完全に停



(驛草淺) 口入道鐵下地

全線
 上野淺草間
 今日ではすでに
 淺草・上野・萬世
 橋・日本橋まで
 開通してゐる
 ハケモイミヤイソ
 アラビアンナイ
 トにある話。あ
 る男がソロモン
 王の命に背いた
 ために壺に封じ

られて海に投げ
 こまれ、數百年
 後ある漁師に助
 け上げられた

車しないと開いてくれない。はや着いたのかと思ふ張合ひ抜の
 した氣持で、朱塗の階段を昇る。そこでもタインスタイルが玩具
 のやうに廻轉してゐる。もう一つ階段を昇ると、蒼空がくつきり
 と額入りに見える。新聞賣の鈴が聞える。そしてとうとう汚れ
 た市内電車が腹一杯の乗客を満載して走つてゐるのが見えた。
 吾妻橋と雷門との間だ。

これは盛り場の淺草と、杖を曳く人の群る上野間の遊覽電車だ。
 貨物運搬の經濟的活動はないが、一日三萬の乗客が吞吐されてゐ
 る。地上の文明に西歐を追つてゐた日本が、これから地下の文明
 を追はうといふのだ。これをしも最も新しい交通機關だといへ
 ば、西洋人は笑ふかも知れないが、仕方がない、日本では一番新しい
 んだから。萬世橋までの第二期工事が竣り、更に品川まで延び、な
 ほ新橋から池上の方まで通じた曉には、我々の生活は地下にまで

見物々

第二期工事
昭和四年に竣工

池上
東京市大森區池上町

江東
隅田川東部の町

江東
隅田川東部の町

擴大される。そして幾十萬年の後、地上の生活に疲れた人間が、この地下鐵道の廢墟に、蜘蛛のやうに巢食つてゐるところを想像するの面白い。更に隅田川の底を潜つて江東へ渡る頃には、我々はあの重苦しい大川の濁水と汚泥のずつとく下の方で、ふとした拍子にギイ／＼といふ艚の音を、錯覺的に聞くこともあるやうになるであらう。

― 改造に據る ―

一六 川柳選

寝てゐても團扇のうごく親ごゝろノ
本降になつて出て行く雨やどり
武者一人叱られてゐる土用干
義貞の勢はあさりをふみつぶし
木曾殿のあと、指さす田螺取り

古池に蛙がひるひる

芭蕉は飛び込み道風は飛びあがり
知れてゐるものをかぞへる泉岳寺
わらぢくひまでは能因氣がつかず
米つきに所をきけば汗をふき
泣く／＼もよい方をとるかたみわけ
おさへれば芒はなせばきり／＼すり
釣れますかなど、^{大玉}文王^の傍^{より}なり
源左衛門鎧を着ると犬が吠え
うたゝねの顔へ一冊屋根に葺き
あしたでも剃つてくれろと飛車がなりけ
かみなりをまねて腹掛やつとさせ
居候三杯目にはそつと出し
武藏坊とかく仕度に手間がとれ

おつかさん又越すのかと孟子いひ
清盛の醫者は裸で脈をとり

一七 アルプスの夏

横 有 恆

横 有恆
新潟縣の人
登山家
アルプス
伊太利・瑞西の
國境を東西に連
互する歐洲第一
の山脈

初夏の滴る喜を心ゆくばかりに吸はうとするならば、アルプスまで登らなければならぬ。アルプスは見果てのつかぬお花畑の夢幻郷だ。足の踏み所もない程に咲く草花に身を横たへて雪山を仰いでみると、森ばたに栗鼠が音を立ててゐる。誠實な生活の可愛らしい音だ。牛の群がまた登つて来る。アルプスの草を追うて村から来るのである。一體アルプスといふ語は土地の人たちには、夏期に放牧する雪線以下の山麓を意味するものなのである。山の裾の村人は、生活の必要物として牛や羊を持つ。主として牛が大多数を占めてゐるが、數多く持つてゐる者もあれば又



畫眞のスブルア

(筆イニチンガセニヤヴヨジ)

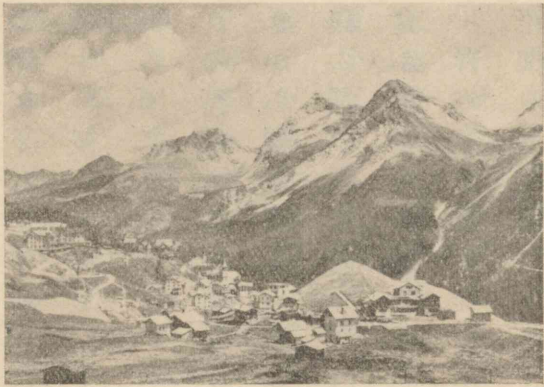
サンミカエル祭
九月二十九日に
行はれるローマ
教會の大祭

少ないものもある。何れにしても彼等は晩春から雪の降りだす
九月下旬、九月二十九日のサンミカエル祭を最終として、各自所有

の頭数だけこのアルプスに牛を放牧す
ることが出来る。

山村が積雪から自由になつて、山麓に
も若萌えが芽ざす五月の下旬、長らく待
焦れたアルプス行の日が来る。その日
には牧夫は黒の天鵞絨に赤縁を取つた
チヨッキに、皮の帽子を被つて先頭に立
つ。次に山羊が二匹位、その後、年長の
牛が大鈴を頸に下げて續く。この鈴は

農夫が家寶として誇るものであつて、古いになると中世紀以來
のものがある。大きいものは直徑七八寸もあるのがあつて多く



山の麓の村

エーデルヴァイス
高山植物の一種
みやまうすゆき
さう

は眞鍮製である。外側にはエーデルヴァイスの浮彫などがあつて、愛すべき風韻を具へてゐる。それを幅の七八寸もある厚い皮の帯に下げて牛の頸に懸ける。この先達牛の後に、十頭も二十頭も牛が續く。この頃になると、村の道は毎日この牛連れの行列に絶え間なく、鈴の音は朝まだきから響き渡る。そして牧夫や牧童は紐の長い鞭を高く空に鳴らして、道草を食ふ牛どもを促して登つて行く。

青い空を戴き、雪の連峯を前にして、お花畑の上に歌つたり想つたりしてゐることの美しい時よ。谷よりそよぐ風は遙かなる牧童の歌を夢幻の中に送り、山々は険しい面持をもつて人の胸に肉薄する。何と

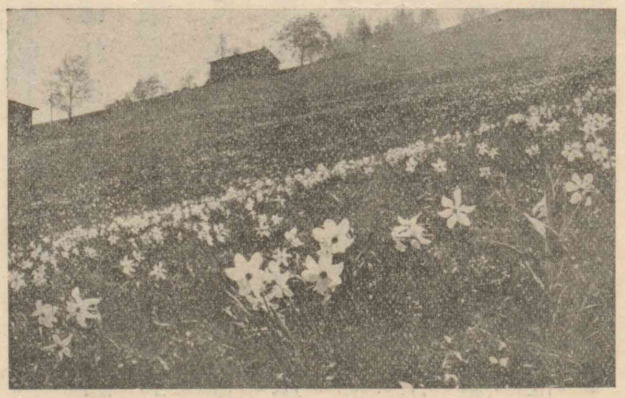


山麓の牧場

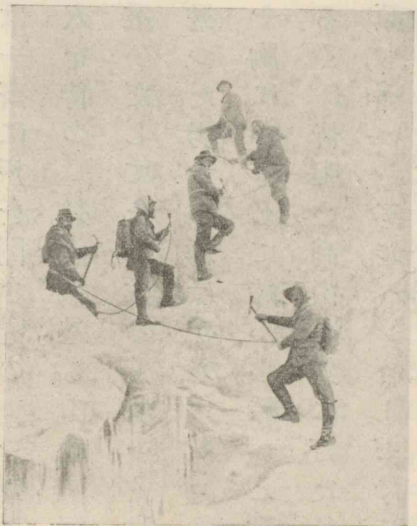
いふ莊嚴な造化であらう。

六月も半ばを過ぎて、アルプスを渡る風の烈しさも柔らかいである時、峠の茶屋や展望の山のホテルなどは一齊に戸を開き、竈の煙を揚げて訪ふ人を待つ。登山鐵道も山麓の傾斜面を這ひだして上下する。ルックサツクを擔つた男女の群は、アルペンローゼを帽や胸にかざして峠から峠へと歌つてあゝる。皆強い高山の氣に打たれて、腕も顔も赭い。アルペンローゼに二種類あるが、何れも赤い花の咲く石楠花である。二つとも殆ど同じであるが、一方の葉は縁が若く、毛を持つてゐて、花が早く咲く。雪の高峯の裾、荒々しい

ルックサツク
登山に用ひる雜
囊の一種
アルペンローゼ
アルプスに咲く
花の一種



お花畑



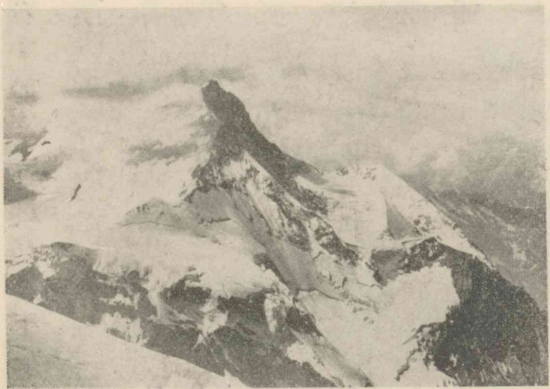
登
山
者
の
土
に
故
郷
の
山
を
想
う
て
焦
れ
死
に
に
死
ん
で
し
ま
ふ
。 たゞ山
に
あ
る
日
の
み
か
の
花
に
幸
は
深
く
穢
れ
な
き
大
氣
を
吸
う
て
美
は

しい面をかざしてゐる。

櫻かざして若人の幸を歌うた昔もなつかしいが、ティロール帽に差した一枝のアルペンローゼに、命の喜を思うて山路を歩むの

ティロール帽
アルプス地方の
人々の被る一種
の帽子

も楽しい。



アルプスの中の一峰

日影が北面の峯から全く逃れて、朝から谷一面に照りつけるやうになれば、牧草も林も新緑が燃えるやうな瑞々しさになる。天鷲絨のやうにアルプスを蔽ふ牧場の緑に見入つてゐる日は限なく麗しい。何處を見ても荒廢の跡がない。滴るやうな若さだ。しかし黄金の光の雨降る日のみではない。地上が餘りに甘い喜に浸る時は、自然は必ず肩を聳やかし聲を怒らして威厳を示す。フェーンの疾風に乗つた雲の群が峯に溢れて狂ひ叫ぶ時は、我等は命懸けだ。たゞその狂暴な意志の奔放を小さくなつて見守つてゐるより仕方がない。

フェーン
春と秋とにアル
プスに吹く強風

しかし夏の間山村を一しきり揺がして忘れたやうに通り過ぎる驟雨は、倦怠を掃ひ去つてくれる。

夕立雲は前山の頂に涌きあがつたかと思ふ間に、雪の山に當つて卷きかへる。今まで陽氣であつた谷も光を失つて空の御機嫌を伺つてゐるやうだ。その内に恐しく強い雷鳴が、峯から峯へ崖から崖へと縦横に駆廻つて轟く。

豪雨だ。見る間に雲の下に露はれた崖に大きな瀑布が幾筋もしぶきを飛ばして、どうくと落下する。山おろしの風が颯々と唐檜の森や村の上を渡る頃は、雨しぶきも薄らいで、雷鳴は氷河の奥の方で迷つてゐる。谷に



マッターホルン

は霧が昇騰し始める。小鳥が待ちかねたやうに囀る。驟雨は過ぎたのだ。雲の間から日光が矢のやうに射て牧場を照す。緑の焰だ。瀑布も細つて跡がまた消える。

農家からは紫煙がゆるくのぼる、忠實な妻女が夫や子供の夕食の支度をしてゐるのであらう。雨後の空氣は十分に濕氣を含んで柔い。しかも爽かな芳氣が溢れる。若芽の香、靜寂な森の呼吸は、ちきれさうな土の誘惑、そのエーテアの中を、美しい小鳥の聲と牛の鈴の音とが天使の歌のやうに舞ふ。

日は西の山に没した。川霧は立昇つて何處よりともなく集り、森の上にたなびく。谷と村とは靜かな暮の藍色が濃くなつて



嵐のアルプス連峰

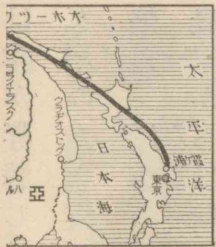
行く。その時である、頂と云ふ頂が悉く日を浴びて赫々と燃えるのは。焰なき、熱なき火だ。目が覺めるやうな透明な赤だ。微動すらしめない沈みきつた色だ。その赤が次第に下から昇る紫に追はれて行く。そして紫より藍へと移つて、遂には頂の一點のみが映える。喜より沈思に、そして遂にメランコリーに移るのが山の夕映である。

―山行―

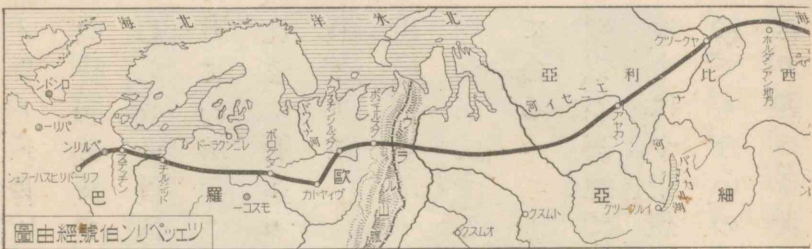
メランコリー
憂鬱症

一八 ツェッペリン来る

銀白の空の王者グラーフツェッペリン號は、歐亞の空一萬キロを悠々翔破して、わが霞ヶ浦海軍飛行場に安着した。同號は十五日午前四時三十四分、スキスとドイツの國境、ボーデン湖のほとりフリードリヒスハーフェンを發して十時半にはベルリンの上空を通



十五日
昭和四年八月十
五日



圖由經號伯ソリパヱリ

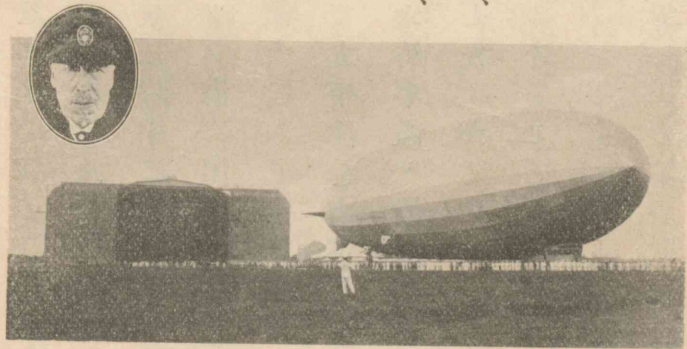
過し同日夜十時にはロシア國境を過ぎ、十六日午後五時半にはウラル山脈をこえて、アジアの空を飛び、十七日には北極圏に近づき、十八日はオーロラに彩られた朝を迎へ、午後三時半には歐亞大陸を完全に横斷して、オホーツク海に出て、午後十一時半には間宮海峡をわが領土に入り、十九日午前八時には北海道を縦斷して太平洋を南下し、午後五時帝都を訪問して、午後六時半霞ヶ浦に着陸するまで、實に百二時間を要した。かくてわれらが世界はとみに狭くなりつゝあることを感ぜざるを得ないのである。

ツェッペリン伯號が世界一周の第一航程を出發したのは、八月七日の夜であり、大西洋を越えて、

第三航程
 昭和四年八月二
 十六日ロサンゼ
 ルスに到着更に
 二十九日レーク
 ハーフトに歸着
 した

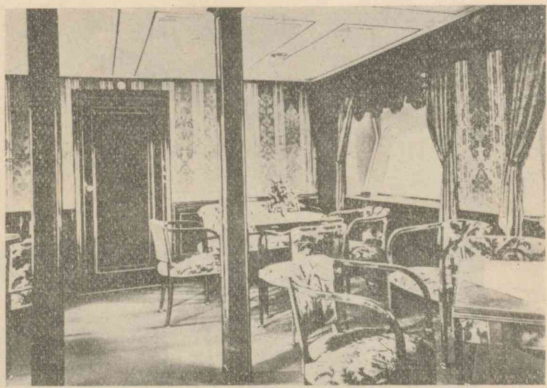
フリードリヒスハーフェンに着いたのは十日の晝であつた。その時間を費すこと、五十五時間二十四分。しかして四日の後には、今回の第二航程に出發したのである。しかしてまた今後三日の休養と準備の後に、太平洋を横斷して、第三航程に入り、ロサンゼルスに着陸して、出發地レークハーフトに戻るまで世界一周を完成する日も、指折り數へて待つべきである。

空の交通によつて、世界を一周することは、もはや空想でないばかりではなくて、冒險でもないのである。ツェッペリン伯號を送り迎へる世界の人々の心に、少しの危げもなき信頼は、こゝに人



士博-ナケツェ長船と號伯ソリベツェツ

類が海を支配したと同じく完全に空を支配する時代の明け始めたことを示すのである。それは、科學と工業と叡智と勇氣との合

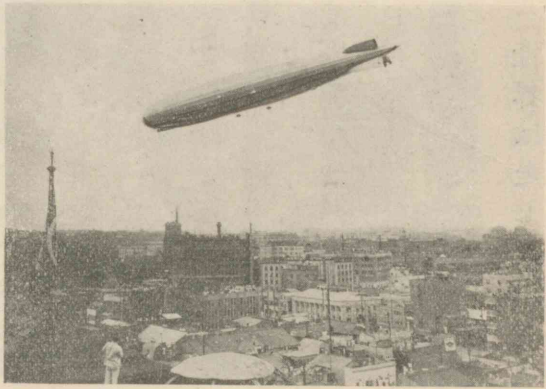


室交社内號伯ソリベツェツ

作、すべての文明、人間能力の協力の到着點である。それはドイツの實であるのみならず、世界の實である。それは我が國とドイツとをつなぐのみならず、世界を國境のない空によつて結ぶのである。大戦中ロンドンの市民が「ツェッペリン來」を叫んで空を仰いだのと、我等が今「ツェッペリン來」を叫んで空を仰ぐのと、何とちがつた感情であらう。

世界はたしかにせまくなつた。狭くなつたのは、關係が緊密になつたことである。ベルリン市長から東京市長へのメッセーヂ

にいへる如くげに現代の技術は世界に散らばつた遠い國國や町
 町の距離を造作もなく縮めて了ふ。而し
 てそれは單に地理的距離の短縮ではな
 くて、世界平和に有害なる民族心の隔絶
 をなくして、互に精神的の歩みを近づけ
 ることにおいて意義が深いのである。
 かくの如くしてウラルの險も歐亞を劃
 するに足らず、太平洋の波も日米兩國を
 隔つるに足らない。ツェペリンは、空界
 の魔王ではなくて、平和の天使である。
 世界の人を乗せて、國境なき歐亞米の空を旅する天空の王者であ
 る。



東京市上空のツェペリン伯號

↑東京朝日新聞に據る

東京朝日新聞

一九 瓜盜人

瓜主罷出てたる者は、この邊の耕作人でござる。當年は瓜を作り
 てござるが、身共が仕合で、殊の外よう出来てござる。今日は畑へ
 見舞うて、臍落の致したを、ちと取つて參らうと存ずる。まことに
 この邊方々に瓜を作りたれども、某がやうなはござらぬ。畑へは
 毎日見舞はねばならぬ。これが身共が畑ぢや。やれ〜嬉しや。
 夥しう生つた。思ひ出した。いつも畑へ獸がついて瓜を荒す。
 人形を作りおかう。人形を一段好い。明日見舞うて臍落を取ら
 う。太鼓座へ入る。

瓜盜、これはこの邊に住居致す者でござる。今日用所ござつて、山
 一つ彼方へ參つてござるが、道に見事な瓜が生つてあつた。私に
 お目をかけらるるお方に、瓜好きな人がござるほどに、今夜あれへ

世話ツェペリン人

十二 ジンギ

参つて、四つ五つ取つて参らうと存ずる。方々に瓜畑が數多ござ
 れども、今日見て置いたやうな、見事な瓜はござらぬ。この邊にあ
 つたが、どの畠ぢや知らぬ。これぢや。まづ垣杭を抜かう。垣を二
 三本抜
がく態をして、腰をか
 がめて畑へはいる。 さあ畑へは這入つたが、番の者は無いか知らぬ。
 有るならば聲を立てうが無いものぢや。晝見たれば瓜がいかい
 事見えたが、夜ぢやによつて見えぬ。これが瓜さうな。瓜かと思
 うたれば枯葉ぢや。あそこを
 捜して見て、 瓜にあたらぬ。この様な事では、
 瓜を取る事はなるまい。何としたものであらう。思ひ出した。
 瓜を取るには轉びをうつて取るものぢやと聞いた。さらばこれ
 から轉びをうつて見よう。さればこそ、枕のやうにあつた。枕
 の
 時寝て居てわらふ。
 つ潰れたわといふ。 一扱もく、扱 好い匂ぢや。此所にあるわ。後の方
 にもあつた。この様にして取らば、如何ほどなりとも取られう。
此所にて地謡ひの方にかがせあり。その
 側へ轉びかゝる。人形を見て肝を潰す。 眞平御免されませ。私は盗人で

二層上へ入り申せやう。

はござりませぬ。こなたの畑が、餘り見事に瓜が生りましたと承
 りまして、見物に参りました。命の儀を御免されませ。瓜二つ三
 つ取りましてござる。皆返しませう。御免なつて下されませ。
 申し、物を仰しやらねば、何とも迷惑でござる。重ねては最早参り
 ますまい程に、平にゆるさせられて、返させられて下されませや。
 申し、なう。手をあげて暗き時物を見
 る態して、人形と見付けて、 これは如何なこと。うしにくら
 はれ、扱もく、よい肝を潰いた。瓜主かと思つて、いくせの事を思
 ひ、迷惑した。この様にやうもようも、上手が作つたものぢや。そ
 の儘人のやうな。獸が見たらば肝を潰いて、あたりへは寄るまい。
 此奴故思ひも寄らぬ肝を潰いた。重ねて來る事ではなし、うちこ
 かいて退けう。腹の立つ事ぢや。瓜蔓も引き搦シつて退けう。よ
 い仕合。急いで戻らう。太鼓の側
 へ入る。
 瓜主、昨日瓜畑へ参つた。まだ臍落が致さなんだ。今日は大方臍

落がござらう。取つて参らう。内の者を遣れば、瓜を盗み居るによつて、某の毎日参らねばならぬ。これは如何な事。散々に畑を荒いておいた。これは扱、蔓も引き撈つて置き居つた。その上人形も打倒れておきをつた。これはいかさま、獣の業ではない。瓜盗人め、ゆうべうせたものであらう。扱もく、腹の立つ事ぢや。今夜は某が案山子になつて捕へう。定めてゆうべの味を得て、また今夜も取りに参らぬことはあるまい。右の人形の様に烏帽子を著、面を被り、左に綱、右に竹の杖、床几に居る。

瓜盗、他所へ物を遣るとも、後前の分別して遣らう事ぢや。盗んだ瓜を、さるお目をかけらるゝ方へ進上、致したれば、さても好い瓜ぢや、これはそちが手作りかと仰せられたによつて、なか／＼、私の手作りでござると申したれば、扱も好い瓜ぢや。近頃無心なれども、客があるほどに、瓜をま四つ五つくれいと仰せらるゝ。何とも返

世新子の人

事の致しやうがなうて、畏まつてござると申した。某の手作りでござると申したによつて、今更なりませまいとも申されぬ。是非に及ばぬ。今夜あれへ行て、瓜を取つて参らうと存ずる。この様に又参らうとは知らいで、瓜畑を散々に荒して置いた。瓜主が見舞はぬ事はあるまい。見舞うたらば、腹を立てて、今夜は番をして居る事もあらう。何とやら胸騒ぎがして氣遣ひな。この畑ぢや、いや、ゆうべ垣を破つて置いたが、その儘ある。定めて瓜主が見舞はなんだものであらう。見舞うたらば、この様にしては置くまい。さればこそ、撈つておいた瓜蔓が、その儘である。嬉しい事ぢや。そろ／＼人形の側へ寄り、見つけて、大きに肝を潰す。これは如何な事。不思議な事ぢや。ゆうべ人形をうちこかいて置いたが、又立てて置いた。これは思へば、瓜主が見舞はぬではない。合點がいかぬ。はあ、合點した。定めて内の者の業であらう。主が畑を見舞うて来いと言ひ付けたによ

つて、見舞はしたれども、人形ばかり立てて置いて、垣もその儘で戻つたものぢやあらう。總じて下々は、どれもこの様なことぢや。殊にこの案山子はゆうべよりは猶よう人に似た。下に居て、うそふきの面へ指さしな。その儘人ぢや。」

瓜盜「これは如何なこと。何者やら飛礫を打つた。四邊に人は無いが、不思議なことぢや。何者が打つたぞ知らぬ。合點が行かぬ。今この綱を引いて肩にかけたればうつたが、はあ、扱もく、よう拵へたものぢや。百姓は賢い者ぢや。これなれば氣遣ひない。」
瓜主面「がつきめ、やるまいぞ、やるまいぞ。」
瓜盜「あら悲しや。免させられ、免させられ。」

— 續狂言記 —

二〇 山のたより

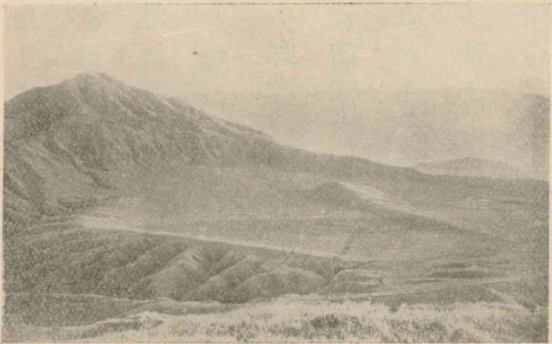
五十嵐 力

一 阿蘇山より



瓜主面

今日愈、阿蘇登山致し候。朝の六時に栃の木温泉を發ち、十一時少し過に山上なる阿蘇大権現の社前に著し候。それより上るこ



阿蘇山

と二十餘町にして、世界一の大噴火口の懸崖の縁に立つべく候。この大噴火口を護りて周圍に立てる外輪の山々は、概ね緑の矮草を纏うて、撫肩麗しく見え候へども、その間を通り過ぎて、大火山口の縁に立ち候へば、光景俄然として一變致し候。磊々たる赭色の火山壁に、白ちやけたる筋の幾つとなく通れる所は、地球といふ大いなる動物の身を切れる横断面とも申すべく、徑十餘町、深さ六十幾間といふ大火山口の底に、色異なる五つの熱湯湖の横はれる趣は、地獄の庖厨とも申すべきか。

山形縣の人

國文學者

文學博士

早稻田大學教授

栃の木温泉

白川の溪谷に沿

ひ高森線長陽驛

から約二軒

二十餘町

約二・一八キロ

メートル

タケノコニハヤ

タケノコニハヤ

タケノコ

おなじイイアリアリツレイル
向邊ツテイタ考カラサナル
……ミタイト思ツツイラス
五ツルガ高ウ知ツキムツキイムツカハ
七湯
湯本・高雄股・辨
天・北・大丸・板
室・三斗小屋

今二十七日
昭和三年七月
ヨホヒモエラシ

思いチアリゾリセウ
ソコツツウ

調平凡なる様に感じ候ひしが今朝の山野の眺望によりて、すつか
り迷の夢を覺されたる心地致し候。この那須の野の渺茫たる青
木が原、何時までこのまま續くかは知らず候へども、原始的なる野
趣の一部分だけは、何時までも保存したく存じ候。五嶽雲際の美
これは此所の名高き七湯の温泉と共に、永へに存在すべく、憂ふる
に足らず候。

今二十七日は正午間近に「聖駕御用邸」に行幸あらせらるとの事
にて、久しぶりの快晴、野も山も、草も木も、御迎へ心に装を凝し候さ
ま、嬉しき限りに候。また晝のうちの晴天が夕方よりうち時雨れ
て、風なき雨しとく、とうち煙り候が、思ふに行宮におちつかせ給
へる大君、なごやかに御寝りませとの、那須の野の神の美しき心づ
かひにも候べし。曉より夜にかけて、美しさ面白さの限りを盡せ
る那須の一日の消息、走筆勿々御知らせ申し上げ候。
不盡

二一 山雀

薄田泣菫



泣菫は號
岡山縣の人
文學者

私の近くにアメリカ歸りの老紳士が住んでをります。その人
が今年の春六甲山へ登つて、その歸りにあたりの松林で小鳥の巢
を見つけました。巢にはやつと羽が生えかけたばかりの雛が四
羽をりました。雛は老紳士を見ると、口を一ぱいに開けて、ちい
いと鳴きました。
「可愛い奴だな。俺の顔を見ると、あんなにもものを欲しがつて
るよ。」

老紳士は何か持ち合せはないかしらと袂をさぐつてみました
が、あひにく巻煙草の箱しか見つかりませんでした。老紳士は大
の煙草好きでしたが、小鳥であり、おまけに未成年者であるこの相

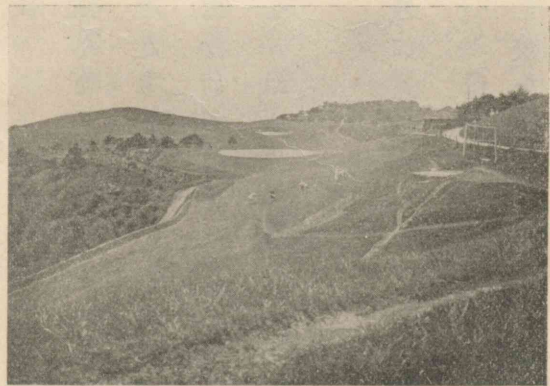
手に、煙草をすゝめるわけにも行きませぬので、前トカミヤリキイトウキヤカもどかしさの思ひをしながらも、黙つて見てをりました。

「可愛い奴だ。何鳥かしら。」老紳士は覗き込むやうにして雛の毛をあらためました。「山雀によく似てゐるな。山雀かい、お前たちは。」

巢の中の小鳥は、それを聞くと、一齊に頭をもちあげて、ちいちいと鳴きました。

「やつぱし山雀だ。」

さう思ふと同時に、その山雀にいろいろな藝を仕込む面白さが老紳士の心を捉へました。親鳥が居合せないのを仕合せに、巢ぐるみ雛を懐中にねぢ込んで、逃げるやうにして山を下りて來ました。そして道々、



山 甲 六

「もうこんなに大きくなつたんだから、餌付さへうまくやつたら、きつと育つだらうて。」

と言譯らしく、獨語をいひました。

小鳥は四羽のうち、三羽までは死にましたが、残つた一羽は餌づけもうまくいつて、無事に育ちました。だが、困つた事には、山雀だと思つて育てた小鳥が、だん／＼大きくなるにつれて、毛色から恰好までそっくり頬白に變つて來ました。老紳士はそれを見ながら、毎日のやうに溜息をついてゐます。

「頬白だつていゝぢやありませんか。山雀とは比べものにならない好い聲で、

一筆啓上仕りそろ……」

と、鳴きますからね。」

といつて、慰めますと、老紳士は浮かぬ顔をして、

晴々しい頬々しい

「いくら好い聲で鳴いたところで、頬白だつたら山雀のやうにこつちの思ひ通りに藝を仕込むわけにはゆきませんからね。」
といつてゐます。

老紳士は閑にまかせて自分の好みを、小さな鳥の上に一つ残しておきたいらしく見えました。

二

山雀といへば、私の子供の頃よく顔を見知つてゐた、親類つゞきの山崎老人の事を思ひ出します。山崎老人は負け嫌ひな、氣性の激しい上に、時勢に對する適應性と才能とを缺いてゐたために、毎日いらだたしさから、自分で自分の生活を腐蝕してゆくより外には仕方がなかつた人でした。都會でも、田舎でも、舊家が衰へ初める頃になると、變質的によくかうした主人を産み出すもので

時勢をなぞる氣性

一般の性質、變質の性質

老人の激しい氣性は、自然村の人たちをその身邊から遠ざけました。老人は話相手のない所在なさといらだたしさとから遁れるために、毎日鐵砲をかついで野山へ出かけました。そして見あたり次第に兎を撃ちました。狐を撃ちました。鼬ハクダを撃ちました。鳶を撃ちました。鳥を撃ちました。雀を撃ちました。一度などは、鯉をとるのだといつて、淵のなかに撃ち込みました。

ある時山崎老人は、いつものやうに鐵砲をかついで山の奥へ入つてゆきました。こんもりした谷の繁みで、老人は一人の若い男が小鳥の巢をさがしあてゝゐるのを見つけました。「何の巢だい、それ。」



山雀

老人は近寄つて訊きました。鐵砲をさげた、眼のきよろ／＼光
るこの老人を胡散ウツシさうに見返りながら、若い男はぶつウツきら棒にい
ひました。

「山雀の巢だよ。」

「それを捕つてかへらうといふのかい。」

「さうだよ。」

「ならぬ、そんなこと。」

「なぜ、出来ないんだ。」

若い男はむつとした顔をあげました。

「俺らかう見えても、商賣人だからな。ここいらの山からは、いつ
も荒鳥をひいて歸るんだよ。」

「いよ／＼怪しからん奴だ。ここいらの山を誰のものだと思ふ。
みんなわしのものだぞ。」

老人は口から出まかせの事を言つて、一寸威張つてみせました。
「よし例んば山がお前さんのものだつて、巢例くつてる鳥まで自分の
ものだとは言ふまい。」

「いや、言ふとも。わしの山にゐる小鳥は、みんな俺のものだ。指
一本差さしはせんぞ。」

老人は山の上に輝いてゐるおてんたう様をも、自分のものだと
言ひかねまい程の意氣込を見せました。

「そんなに威張つたつて、俺が見つけたものを俺が持つて歸るの
に、何の遠慮がゐるもんか。」

若い男はぶつ／＼言ひながら、小鳥の巢をそのまま、持つて來た
籠に移さうとしました。それを見た老人は黙つて二歩三步後退
りをしました。

小鳥を籠に移した商賣人は、何氣なく老人の方を振り返りまし

た。老人は後に立ちほだかつたま、鐵砲の筒口をこちらに向け
て、引金に指をかけてゐました。それを見ると、商賣人はがた／＼
慄へながら、べつたりそこに尻餅をついてしまひました。

山雀はそのまゝ、老人のふところに入りました。老人はそれを
家に持つて歸つて、丹念に餌づけをしてゐましたが、無事に羽が出
そろひますと、みんな籠から取り出して山へ逃がしてしまひまし
た。

それを惜しがつたある人が、

「山雀は仕込みさへしたら、いろんな藝をおぼえるのに……」
といひますと、老人はたつた一言、

「うるさい。」

といつたきり、外つ方を向いたさうです。

太陽は草の香がする
太陽は草の香がする

二二 落葉松

北原白秋



北原白秋
名は隆吉
福岡縣の人
詩人

一 からまつの林を過ぎて、

からまつを心へし見しみと見るき、

からまつは非常なさびさびしかりけり、

たびゆくはさびしかりけり。

二

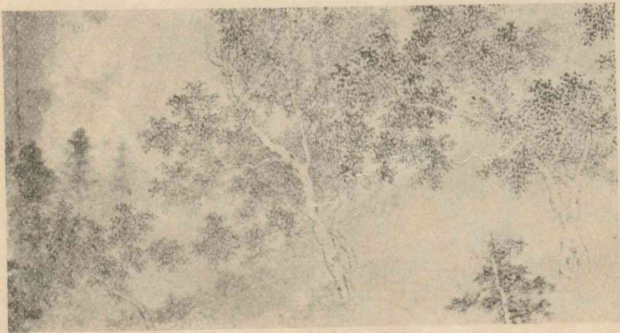
からまつの林を出て、

からまつの林に入りぬ。

からまつの林に入りて、

また細く道はつづけり。

三



自然と人間とが
た會つてゐる
ふは金有難い

淋し
うらみ...

からまつの林の奥も、
わが通る道はありけり。
霧雨のかゝる道なり、
山風のかよふ道なり。

四

からまつの林の道は、
われのみかひともかよひぬ。
ほそぼそと通ふ道なり、
さびくといそぐ道なり。

五

からまつの林を過ぎて、
ゆゑしらず歩みひそめつ。
からまつはさびしかりけり、



風流

からまつとさゝやきにけり。
六
からまつの林を出でて、
浅間巖にけぶり立つ見つ。
浅間巖にけぶり立つ見つ、
からまつのまたそのうへに。

七

からまつの林の雨は、
さびしけどいよよしづけし。
かんこ鳥鳴けるのみなる、
からまつの濡るゝのみなる。

八

世の中よあはれなりけり、



うり世に處する道

山川に山がはの音、
からまつにからまつのかぜ。

二三 世に處する道

勝海舟

北原白秋集

勝海舟
名は安芳
海軍卿
樞密顧問官
明治三十二年歿
(年七十七)

世に處するには、どんな難事に會つても臆してはいけぬ。あ、何でも来い。おれの體がねぢれるなら、ねぢつて見よ。といふ料簡で行くがよい。さうすれば、難事が到來すればするほど面白がついて来て、物事は造作もなく落着してしまふものだ。何でも大膽にかゝらなければいかぬ。どうせうか、かうせうかと躊躇するやうになつてはもういかぬ。若し一度で出来なければ、何度でも出来る所までやり通す。兎角世間の人は、事業の成就する前には、や根氣が盡きて疲れてしまふから、大事が出来ぬのだ。

先事ニル事

自信に立脚して進んで行く

友に對しては、長い間、部下を自負する

下をとり、上をとり、人をとり、物をとり、

静かなる人



確乎たる方針を立て、決然たる自信によつて知己を千載の下に求むる覺悟で進んで行けば、何時しか我が赤心の貫徹する時機が來て、これまで敵視して居た人の中にも互に肝膽を吐露しあふほどの知己が出来るものだ。區々たる

世間の毀譽褒貶を氣にするやうでは到底仕方がない。そこに行くと西郷南洲などはどれ程大きかつたか分らぬ。高輪の一談判で自分の意見を容れたばかりでなく、江戸全市鎮撫の大任まで一切自分に任せて少しも疑はぬ。昨日まで敵味方であつたといふことは何處へか忘れてしまつたやうだ。その度胸の大きいことには、自分もほと／＼感心した。官軍が品川まで押寄せて来て、いまにも江戸城へ攻入らうとす

る際に、西郷は自分が出した唯一本の手紙で、芝田町薩摩屋敷までその談判にやつて来た。當日、自分は羽織袴で馬に騎つて、従者を一人連れたのみで出掛けた。まづ一室へ案内されて暫く待つて



西郷南洲

居ると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を従へ、平氣な顔で出て来た。「これは遅刻しまして誠に失禮」と挨拶をしながら座敷に通つた。その様子はすこしも「大事を眼前に控へたものとは思はれなかつた。

さて愈、談判になると西郷は自分のいふことを一々信用してくれ、その間に二點の疑念を挟まない。「色々むづかしい議論もありませうが、私は一身にかけて御引受します」と、かういふのだ。西郷の

シヤシヨク

自命一命、事ばかり鬼ツリ
云々事行、筆蹟
尊輪拜誦仕候陳
オトシクシカフは唯今田町迄御
來駕被成下候
段爲御知被
下早速罷出候様
可仕候間何卒
御待居被下度
此旨御受迄如
此御座候 頓首
三月十四日
西郷吉之助
安房守様
拜復

桐野
名は利秋
西郷隆盛の幕僚
明治十年歿

この一言で、江戸百萬の生靈もその生命と財産とを保つことが出
來、徳川氏も亦その社稷を保つことを得たのだ。若しこれが他人
の手に回つてしまつたら、いや貴様のいふ事は「自家撞着」
であつたら、いや貴様のいふ事は「自家撞着」だ。とか、言行不一致だ。とか、澤山の暴徒があ
の通り處々に屯集して居るのに、恭順の實
が何處にある。とか、色々喧しく責立てるに
違ない。さうなると談判は忽ち破裂だ。
併し西郷は流石にそんな野暮はいはない。
よく大局を達觀する明と大事に處する斷
とをもつてゐた。

といふ豪傑連は、大勢次の間へ来て、竊かに様子を覗つて居る。薩
摩屋敷の近傍には官軍の兵隊がひしひしと詰めかけて居る。實

傳るべし事

私が日清戦役から凱旋したのは、明治二十八年の八月下旬であつた。久々で家庭の人となつて、氣持よく休んで居ると夜の十二時頃の事である。襖の外に人の來たけはひがして、

「隊長、這入つても可いか」

と唐津訛の聲が聞えた。そのぞんざいな物言といひ、第一私の事を隊長と呼ぶものは、用助より他には無いので、

「かまはん、這入れ。」

と答へると、彼は何か長い包物を抱へて、せい／＼呼吸を切らせながらはいつて來たが、平素に似ず神妙に襖際に畏まつて居る。私も床の上に起き直つて、こんなに遅くどうしたのだ。それに、せい呼吸を切らして。何か急用でも出來たのかと、やゝ詰問的に尋ねると、

「さうぢやあ御座んせん。俺は谷中の御隠居さんとこへ往つて

谷中

谷中

東京市下谷區

來たのだよ。」

といふ。「何も今夜に限つた事ではないぢやないか。」といふと、

「俺はどうしても今夜往つて、御隠居様にの、隊長が禁庭様のために、偉い手柄をして戻つて來た事を、申上げなきや濟まないからさ。俺は御隠居様のお役中も、戦の時も、始終側にゐたがの。御隠居様がお國のためを思ひながら朝敵ちう悪者にされて、江戸にもゐられず、長い間何處に御座つたか知れないで、俺はかうして觀世音に御守護をお願い申した。」

といひつゝ、彼は左の掌を示した。彼は亡父が明治元年に江戸を脱走したと聞いた時に、亡父の無事を祈るため、日頃信仰する觀世音の御像の前に端座して、掌に油を湛へ、燈心を垂らし、それに點火して、掌のジリ／＼焼け爛れるを、ぢつと耐へて、この荒行を三日三晩も續けた。その時の焼痕が、今も歴々と掌に遺つてゐて、彼が誠

不意に降下

タイラマ

玉ミラ生事

實を永久に物語つてゐるのである。彼は今それを示して述懐するのであつた。

「觀世音の御利益は有難いよ。御隠居様は無事で五年目に戻つて御座つた。さうして俺にかう云うたよ。『賢之進に忠義をさせて、禁庭様にお詫びをする。』と、その隊長が、今日立派な手柄をして歸つて來たのだ。早く御隠居様に知らせたいよ。どんなに待つて御座るか知れない。さう思ふと、逆も明日までは待たれないから、用が濟むと出かけて今戻つたのさ。」

彼はかう云つて持參の包を解くと、中から拵付蠟鞘の大小二口の刀が出て來た。彼の説明によると、これは幕末擾亂の際に、重大な密使を果した手柄に對し、亡父より手づから授けられたもので、「機會があつたら私に譲りたいと、久しく考へてゐたのであつたが、今日やうやくその「機會」を見出だしたといふのであらう、彼は突然

賢之進
長生子爵の事

トテモ

フタフリ

例のぞんざいな調子で、

「よし遣らう。」

と云つて私を驚かした。私は感極まつて、早速は返事が出來なかつたが、結局有難く受納して、彼を満足させるより外なかつた。彼は又私の出征中、雪が降らうが、風が吹かうが、毎夜十二時を合圖に、床を蹴つて起き出で、「ざア〜」と「水垢離」をとつてから、家祖小祠の靈前に合掌して、暁天まで讀經を續け、皇軍の勝利と私の武運長久とを祈つてゐた。その態度が餘りに熱烈嚴肅なので、それを見た者は、孰れもその心根に泣かされたといふことである。

大將は以上の長物語を飽きもせず、「ウム」「ウム」と云つて、聽いて居られたが、話が濟むと、拱いた腕を解かれて、

「忠僕ぢや。」

ミハナリ

キヨシキキキキキキ

ウチガミ

力強く領かれたが、その中には無限の同情がこもつてゐた。私は改めて、

「如何でせう、極小さく「南無觀世音」とお書き下さいませんか。それを用助に遣はしたら、どんなにか悦びませうから。」

「僭越ぢやが、此方でよければ書きませう。」



東

郷

平素揮毫の依頼には、容易に

大諾と言はない大將が、早速快諾されたのも、思へば彼が忠節の餘光であらう。そこで早速お

札位の大きさに揮毫を願ひ、用助を呼び出し、大將の好意を告げて件の名號を遣はした。彼は「有難う御座います」と云つて平伏した。大將は慈愛の籠つた眼で、靜かに見やつて、

「貴方には感服したぢや。折角自重して益、忠義を勵みなさい。」

「唯。」

一問一答に何ともいへぬ至純の人情美が溢れ、満座いづれも頭を低れてしまつた。

それから明治四十四年の春、私は學習院の御用係兼務を仰付かつたので、午後は大抵軍令部から、同院の方へ往つて、院長たる乃木大將の相談相手になつてゐた。その年の四月、乃木大將は東郷大將と共に、依仁親王同妃兩殿下に隨行して英國皇帝の戴冠式に列し、八月の下旬に歸朝されたが、それから半月程経つての或日のことである。私は平素のやうに軍令部に出勤するため、早朝邸を出て、俥で十町程行くと、乃木大將が、同じく俥で此方へやつて來られるのに、バタリ出會つた。

石濱 三郎 氏より

キコウ

ハヤシロノミヤノイノ

本ホド

タカハシ

目白
東京市豊島區
學習院の所在地

「こんなに早く何方へお出でになりますか。」
 「貴方のお宅へゆくのだよ。」
 「では此處で御用を承りませう。」
 「何君に今別段急用があると云ふ譯ではないのだから不在でも構はん、ちよつとお宅まで行つて来る。」
 「さうですか、それではこれでお別れして、午後目白でお目に掛かりませう。」
 私は強ひて止めもせず、そのまま別れて出勤し、午後になつて、東通り目白の幹事室で院長に會つた。さうしてその日の要件を片づけてしまつてから、一緒に麥湯を飲みながら雑話に移つた。すると院長は妙な顔をして、
 「小笠原君、今日は君の宅へ始めて往つて、いや酷い目にあつたよ。」
 「どうしてですか。」



乃木大將木像

「實はね、これを英國から持つて來たので、進呈しようと思つて、それが今朝伺つたぢや。玄關で案内を乞ふと、顔の平たい老人が現はれて、『役所はまだ來ん。』といふ。『いや君で可い、御主人が御歸宅になつたなら、これを差上げてくれ。』と云つて、この包を出すと、老人更に受取らん。『主人が不在中は誰からでも、何でも受取つてはならぬと申付かつて居るから。』と難解の言葉で吃々と斷りよる。『いや、俺は乃木ぢや、御主人とは御懇意で、今もつい其處でお目に掛つて來たのぢやから、決して心配はいらん、受取つてくれ。』といふとね、ぢつと自分を見てゐたが、いかに恐縮した様子で、『乃木様で御座いますか。わぎ／＼お出

ワウフ

此處より仔細に書きたる

シキキ

でになつたのに、誠にお氣の毒で相済みませんが、主人の申付に背く譯には參らん。といふ。「いや、取つてくれ。」取らぬ。三十分も押問答をやつたが、しまひには泣き出しさうになつて、それならかうして下さい。主人が歸つて来て、頂戴しても可いというたら、たとひ夜中でも、何處までいも伺つて、お預かりして主人に渡します。と云ふのぢや。理窟が立つちよるので、如何とも仕方がない。すごくと再びその包を持つて俥に乗つたがね。餘り器量はよくなかつたよ。近來あの位の頑物に出遇つた事が無い。實に散々な體さ。いや痛快に頑固な男ぢや。定めし御舊領の者ぢやらうが、藩中かね、それとも村ですか。

大分閣下の御氣に入つた様である。私は鬮眞の彼の事であるから、得意になつて、彼が六十餘年間、三代に仕へて、忠誠一日の如く、親類一門中の衰者である事を物語つた。院長は最初は唯愉快げ

に聽いて居られたが、談話の進むにつれ、次第に昂奮された様子で、やがて瞑目して熱涙を滴らしつゝ、

「天晴れ硬骨漢。小笠原家の實ぢや。よう可愛がつておやりなさい。今後はもう滅多にさういふ人物は出まい。話を聞くだけでも胸がすつきりする。人間の活手本、乃木が敬意を表すると傳へて下さい。」

言ひ了つて、感慨之を久しうされた。

その後院長は折に觸れては、「用助氏は元氣かね」と尋ねられる。決して呼び捨てにはされない。或時などは、私が歸りかけてゐるのを呼び止めて、白金巾に包んだ物を手渡しされ、

「これは今日宮中で頂戴して來た菓子ぢやから、用助氏に遣つて下さい。」

と云はれたこともあつた。忠實の徳といふは恐ろしいものであ

ると、つくづく、私は思つたのである。

「鐵櫻漫談」に據る

二五 故郷の花

（平家物語）

其人アテレバアルテ差支
ヘハルコト
決シテオロソカニ思ツシ
イテハバハリコトカ

薩摩守忠度はいづくよりか歸られけん侍五騎童一人、我が身共七騎取つて返し、五條三位俊成卿の許におはして見給へば、門戸を閉ぢて開かず。「忠度」と名のり給へば、落人還り來れり。とて、その内騒ぎあへり。薩摩守急ぎ飛んで下り、自ら高らかに申されけるは、「是は三位殿に申すべき事あつて、忠度がまるつて候。たとひ門をば開けられずとも、この際まで立寄り給へ。申すべき事の候」と申されたりければ、俊成卿、その人ならば苦しかるまじ。開けて入れ申せ。とて、門を開けて對面ありけり。
事の體何となく物あはれなり。薩摩守申されけるは、先年申承つてより後は、ゆめ／＼疎略を存ぜずとは申しながら、この三箇年

アメンヤ

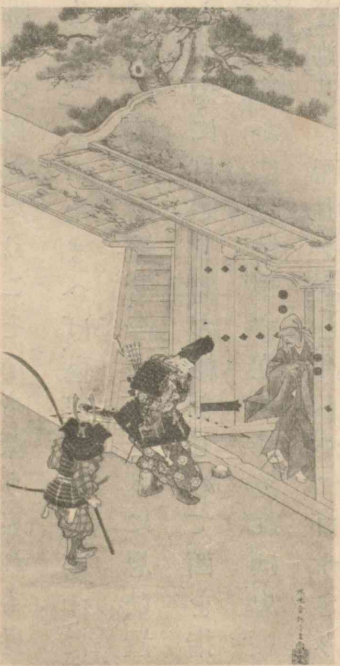
何處も去る事多し
手あし
私敵をさうぶにて

自分一生涯の名譽のため

思フヤキ

死後草葉のひげせりも嬉
しいと思ふ

は京都の騒ぎ、國々の亂出て來剩へ當家の身の上に罷成つて候へば、常にまゐり寄る事も候はず。君既に帝都を出でさせ給ひぬ。一門の運命、今日早盡き果て候。それに就き候うては、撰集の御沙汰あるべき由承つて候ひし程に、生涯の面目に、一首なりとも御恩を蒙らうと存じ候ひつるにかゝる世の亂出て來て、その沙汰



忠度俊成卿を訪ふ (小堀柄音筆)

なく候條、唯一身の歎と存じ候。この後世靜まつて撰集の御沙汰候はゞ、これに候卷物の中に、ざりぬべき歌候はゞ、一首なりとも御恩を蒙つて、草の蔭にても嬉しと存じ候はゞ、遠き御守りとこそ成りまゐらせ候はんずれ。とて、日來詠み置かれたる歌どもの中に秀

例の北畠をみ野にぞこそ事
あふも又まごちるるるるる
唯三流す事あふも今に改り
世に思ひ移す事あり
前道の道りけは道りて日は
暮小のうら雁、列は淋しげに
山の谷地に向ふし空をけり

千載集
勅撰集の一
壽永二年藤原俊
成後白河院の院
宣に依つて撰
集し、後鳥羽天
皇の文治三年九
月奏覽した

歌と思しきを、百餘首書き集められたりける巻物を、今はとて打立
たれける時、これを取つて持たれたりけるを、鎧の引合せより取出
で、俊成卿に奉らる。三位これを開いて見たまひて、かゝる忘れ
形見どもを賜はり候上は、ゆめく疎略を存ずまじう候。さても
唯今の御わたりこそ情も深う、哀れも殊に勝れて感涙抑へ難うこ
そ候へとのたまへば、薩摩守、骸を野山に曝さば曝せ、うき名を西海
の波に流さば流せ、今はうき世に思ひ置く事なし。さらば暇申す。
とて、馬に打乗り、冑の緒をしめて、西を指してぞ歩ませ給ふ。三位
後を遙かに見送つて立たれたれば、忠度の聲とおほしくて、前途程
遠馳思於雁山夕雲と、高らかに口ずさみ給へば、俊成卿もいと哀
れにおぼえて、涙を抑へて入り給ひぬ。
その後世静まつて、千載集を撰ぜられけるに、忠度のありし有様、
言ひ置かれし言の葉、今更思出で、哀れなりけり。件の巻物の中

天子より勅書仰せられし
中にも、不承の事あり
・ア、筆力ア、志賀都に流し
テ、心か、山櫻の八景の事
昔、志賀の都は、山櫻の
一まつが、昔のまの山櫻の
まをしと、知れざるわい、即ち志賀の都は
か、山櫻の都は、山櫻の都は
山櫻の都は、山櫻の都は

にさりぬべき歌幾らもありけれども、その身勅勘の人なれば、名字
をば顯さず、故郷花といふ題にて詠まれたりける歌一首ぞ、讀人不
知と入れられたる。
さざ浪や志賀の都はあれにしを
昔ながらの山櫻かな
その身朝敵と成りぬる上は、仔細に及ばずといひながら、恨めし
かりし事どもなり。

二六 安壽と厨子王

森 鷗 外

あくる朝、二人の子供は背に籠を負ひ、腰に鎌を挿して、手を引き
合つて木戸を出た。山椒大夫の所に來てから、二人一しよに歩く
のはこれが始めである。
厨子王は姉の心を付り兼ねて、寂しいやうな、悲しいやうな思に



鷗外
名は林太郎
鳥根縣の人
醫學博士
文學博士
大正十一年歿
(年六十三)

胸が一ぱいになつてゐる。きのふも奴頭の歸つた跡で、いろ／＼に詞を設けて尋ねたが、姉はひとりて何事をか考へてゐるらしく、それをあからさまには打ち明けずにしまつた。

山の麓に來た時、厨子王はこらへ兼ねて言つた。「姉さん、わたしはかうして久し振で一しよに歩くのだから、嬉しがらなくてはならないのですが、どうも悲しくてなりません。わたしはかうして手を引いてゐながら、あなたの方へ向いて、その禿になつたお頭を見るのが出来ません。姉さん、あなたはわたしに隠して、何か考へてゐますね。なぜそれをわたしに言つて聞かせてくれないのです。」

安壽はけさも毫光のさすやうな喜を額へ湛へて、大きい目を赫かしてゐる。併し弟の詞には答へない。只引き合つてゐる手に入れただけである。

山に登らうとする所に沼がある。汀には去年見た時のやうに、枯葦が縦横に亂れてゐるが、道端の草には黄ばんだ葉の間に、もう青い芽の出たのがある。沼の畔から右に折れて登ると、そこに岩の隙間から清水の湧く所がある。そこを通り過ぎて、岩壁を右に見つゝ、うねつた道を登つて行くのである。

丁度岩の面に朝日が一面に差してゐる。安壽は疊なり合つた岩の、風化した間に根を卸して、小さい葦アシの咲いてゐるのを見附けた。そしてそれを指さして厨子王に見せて云つた。「御覽。もう春になるのね。」

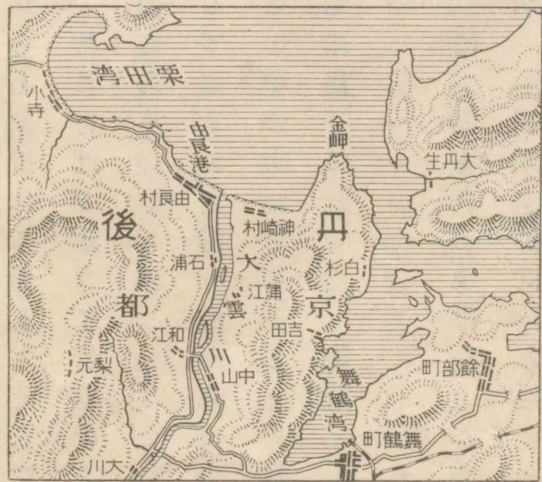
厨子王は黙つて頷いた。姉は胸に祕密を蓄へ、弟は憂ばかりを抱いてゐるので、兎角受應が出来ずに、話は水が砂に沁み込むやうにとぎれてしまふ。

去年柴を刈つた木立の邊に來たので、厨子王は足を駐めた。「姉

さん。こちらで刈るのです。」

「まあ、もつと高い所へ登つて見ませうね。」安壽は先に立つてずんずん登つて行く。厨子王は訝りながら附いて行く。暫くして雑木林よりは餘程高い、外山の頂とも云ふべき所に來た。

安壽はそこに立つて、南の方をぢつと見てゐる。目は、石浦を経て由良の港に注ぐ大雲川の上流を辿つて、一里許り隔つた川向に、こんもりと茂つた木立の中から、塔の尖の見える中山に止まつた。そして「厨子王や」と弟を呼び掛けた。「私が久しい前から考へ事をしてゐて、お前ともいつもの様



大雲川地方地圖

に話をしないのを、變だと思つてゐたでせうね。もうけふは柴なんぞ刈らなくても好いから、私の言ふ事を好くお聞き。小萩は伊勢から賣られて來たので、故郷からこの土地迄の道を、わたしに話して聞かせたがね、あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ往くのは難しいし、引返して佐渡へ渡るのも、たやすい事ではないけれど、都へはきつと往かれます。お母様と御一緒に岩代を出てから、わたし共は恐ろしい人にばかり出逢つたが、人の運が開けるものなら、善い人に出逢ぬにも限りません。お前はこれから思ひ切つて、この土地を逃げ延びて、どうぞ都へ登つておくれ、神佛のお導きで、善い人にさへ出逢つたら、筑紫へお下りになつたお父様のお身の上も知れよう。佐渡へお母様をお迎へに往くことも出來よう。籠や鎌は棄てて置いて、櫛子かみこだけ持つて往くのだよ。厨子王は黙つて聞いてゐたが、涙が頬を傳つて流れて來た。

「そして、姉さん、あなたはどうしようかと云ふのです。」

「わたしの事は構はないで、お前一人でする事を、わたしと一しよにする積でしておくれ。お父様にもお目に掛かり、お母様をも鳥からお連れ申した上で、わたしをたすけに來ておくれ。」

「でもわたしがゐなくなつたら、あなたをひどい目に逢はせませう。」厨子王が心には烙印ヤキインをせられた、恐ろしい夢が浮ぶ。

「それは苛るかも知れないがね、わたしは我慢して見せます。金で買った婢をあの人達は殺しはしません。多分お前がゐなくなつたら、わたしを二人分働かせようとするでせう。お前の教へてくれた木立の所で、わたしは柴を澤山刈ります。六荷までは刈れないでも、四荷でも五荷でも刈りませう。さあ、あそこまで降りて行つて、籠や鎌をあそこに置いてお前を麓へ送つて上げよう。」かう云つて安壽は先に立つて降りて行く。

厨子王はなんとも思ひ定め兼ねて、ぼんやりして附いて降りる姉は今年十五になり、弟は十三になつてゐるが、女は早くおとなびて、その上物に憑ツキかれたやうに、聰サトく賢サトしくなつてゐるので、厨子王は姉の詞に背くことが出來ぬのである。

木立の所まで降りて、二人は籠と鎌とを落葉の上に置いた。姉は守本尊を取り出して、それを弟の手に渡した。「これは大事なお守だが、今度逢ふまでお前に預けます。この地藏様をわたしだと思つて、護刀と一しよにして、大事に持つてゐておくれ。」

「でも姉さんにお守がなくては。」

「いゝえ。わたしよりはあぶない目に逢ふお前にお守を預けます。晩にお前が歸らないときつと討手が掛かります。お前が幾ら急いでも、あたり前に逃げて行つては、追ひ附かれるに極まつてゐます。さつき見た川の上手を和江と云ふ所まで往つて、首尾好

く人に見附けられずに、向河岸へ越してしまへば、中山までもう近い。そこへ往つたら、あの塔の見えるたお寺に這入つて隠しておもらひ。暫くあそこに隠れてゐて、討手が歸つて來た跡で、寺を逃げてお出で。」

「でもお坊さんが隠して置いてくれるでせうか。」

「さあ、それが運験しだよ。開ける運なら坊さんがお前を隠してくれませう。」

「さうですね。姉さんのけふ仰しやる事は、まるで神様か佛様が仰しやるやうです。わたしは考を極めました。なんでも姉さんの仰しやる通りにします。」

「おう、好く聽いておくれだ。坊さんは善い人で、きつとお前を隠してくれます。」

「さうです。わたしにもさうらしく思はれて來ました。逃げて

都へも往かれます。お父様やお母様にも逢はれます。姉さんのお迎へにも來られます。」厨子王の目が姉と同じ様に赫いて來た。「さあ、麓まで一しよに行くから、早くお出で。」

二人は急いで山を降りた。足の運びも前とは違つて、姉の熱した心持が暗示のやうに弟に移つて行つたかと思はれる。

泉の湧く所へ來た。姉は樫子に添へてある木の椀を出して、清水を汲んだ。「これがお前の門出を祝ふお酒だよ。」かう云つて一口飲んで弟に差した。

弟は椀を飲み干した。「そんなら姉さん、御機嫌好う。きつと人に見附からずに、中山まで参ります。」

厨子王は十歩ばかり残つてゐた坂道を、一走りに駆け降りて、沼に沿うて街道に出た。そして大雲川の岸を上手へ向つて急ぐのである。

安壽は泉の畔に立つて竝木の松に隠れては又現れる後影を小さくなるまで見送つた。そして日は漸く午に近づくのに、山に登らうともしない。幸にけふはこの方角の山で木を樵る人がないと見えて、坂道に立つて時を過す安壽を見咎めるものもなかつた。後に同胞を捜しに出た、山椒大夫一家の討手が、この坂の下の沼の端で、小さい藁履を一足拾つた。それは安壽の履であつた。

中山の國分寺の三門に、松明の火影が亂れて、大勢の人がこみ入つて来る。先に立つたのは、白柄の薙刀を手挟んだ山椒大夫の息子三郎である。

三郎は堂の前に立つて大聲に云つた。「これへ參つたのは、石浦の山椒大夫が族うぢのものぢや。大夫が使ふ奴の一人が、この山に逃げ込んだのを慥に認めたものがある。隠れ場は寺内より外にはない。すぐにここへ出して貰はう。」附いて來た大勢が、さあ、出して貰はう、出して貰はう。」と叫んだ。

本堂の前から門の外まで、廣い石疊が續いてゐる。その石の上には、今手に手に松明を持つた三郎が手のものが押し合つてゐる。又石疊の兩側には、境内に住んでゐる限の僧俗が、殆ど一人も残らず簇つてゐる。これは討手の群が門外で騒いだ時、内陣からも庫裡からも、何事が起つたかと、怪しんで出て來たのである。

初め討手が門外から門を開けいと叫んだ時、開けて入れたら亂暴をせられはすまいかと心配して、開けまいとした僧侶が多かつた。それを住寺曇どん猛まう律師りしが開けさせた。併し今三郎が大聲で、逃げた奴を出せと云ふのに、本堂は戸を閉ぢた儘、暫くの間ひつそりとしてゐる。

三郎は足踏をして、同じ事を二三度繰り返した。手のものの中

から和尙さん、どうしたのだ。」と呼ぶものがある。それに短い笑聲が交る。

やう／＼の事では本堂の戸が静かに開いた。曇猛律師が自分で開けたのである。律師は偏袒へんたん一つ身に纏つて、なんの威儀をも繕はず、常燈明の薄明を背にして本堂の階の上に立つた。丈の高い巖壘な體と、眉のまだ黒い廉張つた顔とが、揺めく火に照らし出された。律師はまだ五十歳を越したばかりである。

律師は徐に口を開いた。騒がしい討手のものも、律師の姿を見ただけで黙つたので、聲は隅々まで聞えた。逃に逃げた下人を捜しに來られたのぢやな。當山では住持しゆぢのわしに言はずに人は留めぬ。わしが知らぬから、そのものは當山たうざんにゐぬ。それはそれとして、夜陰に劔戟を執つて、多人数押し寄せて參られ、三門を開けと云はれた。さては國に大亂でも起つたか、公の叛逆人でも出來たかと思

うて、三門を開けさせた。それはなんぢや。御身が家の下人の詮議せんぎか。當山は勅願の寺院で、三門には勅額を懸け、七重の塔には宸翰かん金字の經文が藏めてある。ここで狼籍を働かれると、國守は檢校けんぎょうの責を問はれるのぢや。又總本山東大寺に訴へたら、都からどのやうな御汰沙があらうも知れぬ。そこを好う思うて見て、引き取られたが好からう。悪い事は言はぬ。お身達のためぢや。かう云つて律師は徐かに戸を締めた。

この時大聲で叫ぶものがあつた。「その逃げたと云ふのは十二三の小わつばぢやらう。それならわしが知つてをる。」

三郎は驚いて聲の主を見た。父の山椒大夫に見まがふやうな親爺で、この寺の鐘樓守である。親爺は詞を繼いで云つた。「そのわつばはな、わしが午頃鐘樓から見てをると、築つ泥ぢの外を通つて南へ急いだ。かよわい代りには身が軽い。もう大分の道を行つた

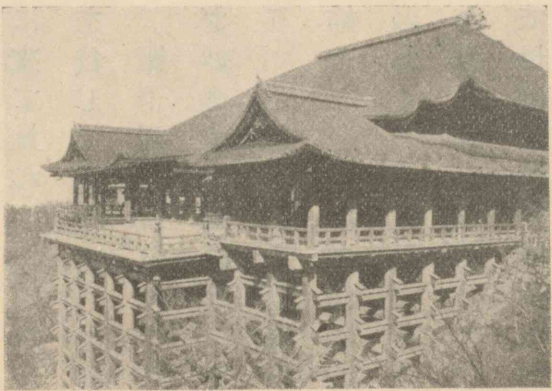
ぢやろ。」

「それぢや。半日に童の行く道は知れたものぢや。続け。」と云つて三郎は取つて返した。

松明の行列が寺の門を出て、築泥の外を南へ行くのを、鐘樓守は鐘樓から見て、大聲で笑つた。近い木立の中で、やうやう落ち著いて寝ようとした鴉が二三羽又驚いて飛び立つた。

あくる日に國分寺からは諸方へ人が出た。石浦に往つたものは安壽の入水の事を聞いて來た。南の方へ往つたものは、三郎の率ゐた討手が田邊まで往つて引き返した事を聞いて來た。

中二日置いて、曇猛律師が田邊の方へ向いて寺を出た。盥ほどある鐵の受糧器を持つて腕の太さの錫杖を衝いてゐる。跡から頭を剃りこくつて三衣さんいを著た厨子王が附いて行く。



二人は眞晝に街道を歩いて、夜は所々の寺に泊つた。山城の朱雀野に來て、律師は權現堂で休んで、厨子王に別れた。「守本尊を大

切にして往け、父母の消息はきつと知れる。」言ひ聞かせて、律師は踵を旋した。

亡くなつた姉と同じ事を云ふ坊様だと厨子王は思つた。

清水 都に上つた厨子王は僧形になつてゐるので、東山の清水寺に泊つた。

籠堂かごどうに寝て、あくる朝目が醒めると直ち衣えに烏帽子を着て指貫さしぬきを穿いた老人が、枕元に立つてゐて云つた。「お前は誰の

子ぢや。何か大切な物を持つてゐるならどうぞ己に見せてくれい。己は娘の病氣の平癒を祈るために、ゆうべここに參籠した。

モロザネ
師實
藤原氏
頼通の子

すると夢にお告があつた。左の格子に寝てゐる童が好い守本尊を持つてゐる。それを借りて拜ませいと云ふ事ぢや。けさ格子に来て見れば、お前がゐる。どうぞ己に身の上を明かして守本尊を貸してくれい。己は關白師實ぢや。

厨子王は言つた。「わたくしは陸奥掾正氏かつのじゆうまろじと云ふものの子でございます。父は十二年前に筑紫の安樂寺へ往つたきり、歸らぬさうでございませう。母はその年に生まれたわたくしと、三つになる姉とを連れて、岩代の信夫郡に住むことになりました。そのうちわたくしが大ぶ大きくなつたので、姉とわたくしとを連れて、父を尋ねに旅立ちました。越後まで出ますと、恐ろしい人買に取られて、母は佐渡へ、姉とわたくしとは丹後の由良へ賣られました。姉は由良で亡くなりました。わたくしの持つてゐる守本尊はこの地藏様でございませう。かう云つて守本尊を出して見せた。

仙洞
白河法王をさし
奉る

師實は佛像を手に取つて、先づ額に當てるやうにして禮をした。それから面背を打ち返し、打ち返し、丁寧に見て言つた。「これは兼ねて聞き及んだ尊い放光王地藏菩薩の金像ぢや。百濟國から渡つたのを、高見王が持佛にして御出なされた。これを持ち傳へてをるからは、お前の家柄に紛れはない。仙洞がまだ御位にをらせられた永保の初に、國守の違格に連座して、筑紫へ左遷せられた平正氏が嫡子に相違あるまい。若し還俗の望があるなら、追つては受領の御沙汰もあらう。先づ當分は己の家に客にする。己としよに館へ來い。」

關白師實の娘と云つたのは、仙洞に傳いてゐる養女で、實は妻の姪である。この後は久しい間病氣でゐられたのに、厨子王の守本尊を借りて拜むと、すぐに拭ふやうに本復せられた。

師實は厨子王に還俗させて、自分で冠を加へた。同時に正氏が謫所へ、赦免状を持たせて、安否を問ひに使を遣つた。併しこの使が往つた時、正氏はもう死んでゐた。元服して正道と名告つてゐる厨子王は、身の窶れる程歎いた。

その年の秋の除目に、正道は丹後の國守にせられた。これは遙授の官で、任國には自分で往かずに掾を置いて治めさせるのである。併し國守は最初の政として、丹後一國で人の賣買を禁じた。そこで山椒大夫も悉く奴婢を解放して、給料を拂ふことにした。大夫が家では一時それを大きい損失のやうに思つたがこの時から農作も工匠の業も前に増して盛になつて、一族いよいよ富み榮えた。國守の恩人曇猛律師は僧都にせられ、國守の姉をいたはつた小萩は故郷へ還された。安壽が亡き跡は懇に弔はれ、又入水した沼の畔には尼寺が立つことになつた。

正道は任國のためにこれだけの事をして置いて、特に假寧を申し請うて、微行して佐渡へ渡つた。

佐渡の國府は雜太と云ふ所にある。正道はそこへ往つて、役人の手で國中を調べて貰つたが、母の行方は容易に知れなかつた。

或日正道は思案に暮れながら、一人旅館を出て市中を歩いた。そのうちいつか人家の立ち並んだ所を離れて、畑中の道に掛かつた。空は好く晴れて日があかあかと照つてゐる。正道は心の中に、どうしてお母様の行方が知れないのだらう、若し役人なんぞに任せて調べさせて、自分が捜し歩かぬのを神佛が憎んで逢はせて下さらないのではあるまいか、などと思ひながら歩いてゐる。ふと見れば、大ぶ大きい百姓家がある。家の南側の疎な生垣の内が、土を敲き固めた廣場になつてゐて、その上に一面に蓆が敷いてある。蓆には刈り取つた粟の穂が干してある。その真ん中に、檻褌

を著た女がすわつて、手に長い竿を持つて、雀の來て啄むのを逐つてゐる。女は何やら唄のやうな調子でつぶやく。

正道はなぜか知らず、この女に心が牽かれて、立ち止つて覗いた。女の亂れた髪は塵に塗れてゐる。顔を見れば盲である。正道はひどく哀れに思つた。そのうち女のつぶやいてゐる詞が、次第に耳に慣れて聞き分けられて來た。それと同時に正道は瘡病かさびのやうに身内が震つて、目には涙が湧いて來た。女はかう云ふ詞を繰り返してつぶやいてゐたのである。

安壽戀しや、ほうやれほ。

厨子王戀しや、ほうやれほ。

鳥も生あるものなれば、

疾う疾う逃げよ、逐はずとも。

正道はうつとりとなつて、この詞に聞き惚れた。そのうち臟腑

が煮え返るやうになつて、獸めいた叫が耳から出ようとずるのを、齒を食ひしばつてこらへた。忽ち正道は縛られた繩が解けたやうに垣の内へ駆け込んだ。そして足には粟の穂を踏み散らしつゝ、女の前に俯伏した。右の手には守本尊を捧げ持つて、俯伏した時に、それを額に押し當ててゐた。

女は雀でない、大きいものが粟をあらしに來たのを知つた。そしていつもの詞を唱へ罷めて、見えぬ目でぢつと前を見た。その時干した貝が水にほとびるやうに、兩方の目に潤ひが出た。女は目が開いた。

「厨子王」と云ふ叫が女の口から出た。二人はびつたり抱き合つた。

— 鷗外全集 —

帝國新國文卷五終

專修科第二學年機械科

植木 千登

帝國新國文卷五

昭和七年十一月五日印刷
昭和八年十二月二日訂正發行
昭和八年八月八日訂正發行

定價金六拾錢

編者 藤村作

發行者 株式帝國書院
東京市神田區西神田一丁目三番地

代表者 增田啓策

印刷者 高橋郁
東京市京橋區銀座西二ノ三

發行所 株式帝國書院
東京市神田區西神田一丁目三番地

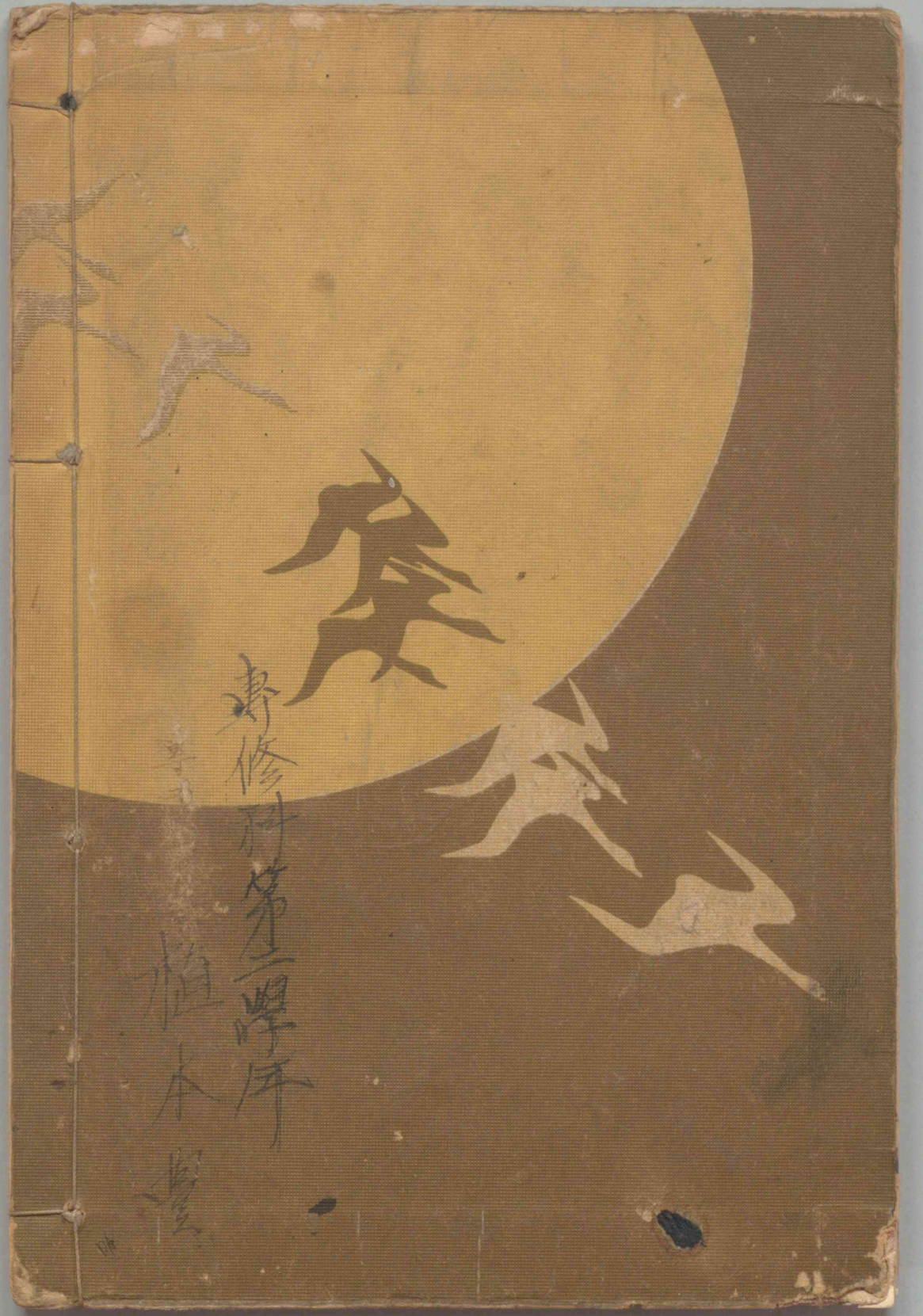
振替口座東京三二四

關西販賣所 大阪市東區橫堀四ノ三
三宅莊藏書店

振替口座大阪六九



己 午



森

大

專修科第三學年

植木豊